魔法少女リリカルなのは

Magical girl lyrical Nanoha. She whispers some words mildly in your heart , and makes your gentle days.

都築真紀・ivory◆原作
都築真紀◆文
奥田泰弘・長谷川光司◆イラスト



メガミ文庫

9784059035060
ISBN4-05-903506-8
C0193 ¥550E
1B4206
1920193005509
定価：本体550円
※税が別に加算されます。
発行・学習研究社

魔法少女リリカルなのは

平凡な小学三年生、高町なのは。不思議なフェレットのユーノと、彼が持つ魔法のデバイス・レイジングハートとの出会いで、魔法少女としての運命に巻き込まれる。危険な古代遺産「ジュエルシード」を巡り争うことになる異世界の少女、フェイト・テスタロッサとの出会いや時空管理局の介入から事態は激しさを増し、戦いの日々へと…。悲しい運命を背負ったフェイトにひかれ、同じ寂しさを分かち合いたいと願ったなのは。「友達に、なりたいんだ」思いを届けるため、なのはは自らが得た魔法を手に、フェイトと、運命との戦いを選んだ――。

Megami BUNKO

魔法少女リリカルなのは

都築真紀・ivory◆原作
都築真紀◆文
奥田泰弘・長谷川光司◆イラスト

006

魔法少女としての運命に巻き込まれた小学三年生、
高町なのは。危険な古代遺産「ジュエルシード」を巡り
争うことになる異世界の少女、フェイト・テスタロッサ。
悲しい運命を背負ったフェイトにひかれ、
同じ寂しさを分かち合いたいと願ったなのは。
「友達に、なりたいんだ」
思いを届けるため、なのはは自らが得た魔法を手に、
フェイトと、運命との戦いを選んだ——。



原作・文 都築真紀
マンガ・ゲーム原作・脚本で活躍するクリエイター。アニメーション『魔法少女リリカルなのは』原作・脚本を手掛ける。

イラスト 奥田泰弘
アニメーター。アニメーション『魔法少女リリカルなのは』キャラクターデザイン・作画監督を手掛ける。

イラスト 長谷川光司
マンガ家。『B-CLUB』（メディアワークス）でマンガ家デビュー。代表作に『独立降下隊ガンフェロン・アドベンチャー』（メディアワークス）、『天使のしっぽ』（学研）、『しあわせミルフィーユ』（原画担当・工画堂スタジオ）などがある。月刊メガミマガジンにてコミック『魔法少女リリカルなのはA's』連載中。

















魔法少女リリカルなのは

都築真紀・ivory◆原作　都築真紀◆文　奥田泰弘・長谷川光司◆イラスト

メガミ文庫

THE CHARACTERS
登場人物



高町なのは

▶９歳／私立聖祥大附属小学校・三年生。偶然がきっかけで魔法と出会い、以降、魔導師としての日々を過ごす。優しい性格だが、思いこんだら一直線。ちなみに左利き。

ユーノ・スクライア

◀9歳／異世界から来た魔法使いの少年。普段はフェレットに似た小動物に変身し、ペットとして高町家で暮らしている。



アルフ

◀16歳／フェイトが作った使い魔。若い娘と犬形態の二つの姿を持つ。

リニス

▼プレシアが作った使い魔。フェイトの世話や教育をする。

フェイト・テスタロッサ

▶9歳／異世界ミッドチルダ出身の魔導師。母親であるプレシア・テスタロッサの願いを叶えるため、なのはと戦っていた。物静かだが、魔導師としては一流の技を持つ。

プレシア・テスタロッサ

フェイトの母親で、次元空間航行の機能を持つ「時の庭園」の主。

目次

イラストギャラリー

カバー・初出：メガミマガジン2004年11月号
原画／奥田泰弘　仕上げ／田崎智子　背景／片平真司　特効／斉藤恵

P3・DVD第1巻ジャケットより

P4・DVD第2巻ジャケットより

P5・DVD第3巻ジャケットより

P6・DVD第4巻ジャケットより

P7・DVD第5巻ジャケットより

P8・初出：メガミマガジン2004年12月号
原画／奥田泰弘　仕上げ／田崎智子　背景／片平真司　特効／新里栄樹

P9・初出：メガミマガジン2005年2月号
原画／奥田泰弘　仕上げ／田崎智子　背景CG／草川啓造　特効／斉藤恵

P10・初出：メガミマガジン2005年3月号
原画／奥田泰弘　仕上げ／田崎智子　背景／片平真司　特効／新里栄樹

本文・イラスト／長谷川光司

序章



五月二十七日（金）　午前3時40分　海鳴市藤見町（うみなりしふじみちょう）

春の寒気（かんき）も去り、風も温み始めた五月も末。
賑やかな市街から幾分離れた閑静な住宅街の、その一角。
広い敷地を持つ民家の庭先に、小さな剣道場がしつらえられている。
この家の五人の家人のうち、父と長男・長女の三人が剣を修め、学んでいる。
そんな家人たちの稽古のために作られた道場であり、早朝や夜には板張りの床を踏み叩く音や、木剣（ぼっけん）が風を切り、乾いた音を立ててぶつかり合う音が響き渡る場である。

早朝というよりは深夜に近い午前3時過ぎ。ひと気のあるはずもない道場の一角に、今、少女が一人、きちんと膝を揃えた正座姿でそこにいる。
頭の両脇で愛らしく結った髪型や、鮮やかな桜色のTシャツ、革紐の先に赤い宝石をあしらった簡素なペンダントといった装いは、十歳程度に見える少女の外観によく似合ったものだった。
目を閉じているが、眠っているわけではない。
静かな呼吸は規則正しいリズムを刻み、まっすぐに伸びた背筋はしっかりと頭部を支えている。
少女はこの家の次女であり、三人兄妹の末子である。
自身が剣を学んでいるわけではなかったが、少女は兄姉たちが多くの時を過ごす道場

の、硬く張りつめた空気が好きだった。
それ故に、少女は何か立ち向かわなければならない事柄がある時、一人ここに足を運ぶ。

そして、20分あまりを過ぎたころ。
少女はゆっくりと、閉じていた瞳を開いた。
ほぼ同時に、少女が首から提げた赤い宝石が、小さく自ら発光した。
出立の時間を、主に伝えているのだった。
それに微笑みで答え、少女は立ち上がって、まっすぐに前を見る。
その眼差しに迷いはなく、瞳には強い意志を秘めていた。

少女の名を、高町なのはと言う。
現在九歳。
魔導師の杖・レイジングハートを手にミッドチルダ式の魔法を操る「魔導師」である。

　同日同時刻　ミッドチルダ山中　「時の庭園」停泊地痕

次元世界の中でも繁栄著しく、最先端の魔法技術を持つミッドチルダ。

広大な世界のうち、首都を初めとする中心地区は、天を衝く人工建築物が立ち並ぶ近代的な都市だが、開発の進んでいない地方は緑豊かな自然がふんだんに残っている。
ここアルトセイム地方の山中もまた、人の手が入ることのない自然の地である。
山と森、湖に囲まれた自然の楽園。湖の近いその一角に、大きな人工の窪地がある。
かつてここには、巨大な庭園があった。
ミッドチルダの魔法技術によって作られた、次元世界の航行すら可能な移動庭園。
「時の庭園」と名づけられたそこにはかつて四人の住人が生活していた。

時の庭園がこの地を発ち、すでに2年近くが経過している。
窪地の中の剥き出しの土には、春の緑が萌えはじめていた。

山の早い夜がゆっくりと明け始める頃。一人の少女が、その地を訪れた。
長い金の髪は頭部の両側に結われて黒いリボンでまとめられ、半袖のボタンシャツも同様に黒かった。十歳を少し過ぎたように見えるが、手足のか細さや小さな手が、少女の印象をどこか幼く見せていた。
少女の名を、フェイト・テスタロッサと言う。常から感情を押し殺したようなフェイトの眼差しが、今は幾らか悲しみの色に染まっていた。
この地を訪れるのは、時の庭園で生まれ育ったフェイトにとっては帰郷の意味合いを持

つ。いまだ何も知らず、ひたすらに学び、遊び、野山を駆け回っていた無邪気な頃。懐かしく思い出すはずのそれらの記憶は、現在のフェイトには痛みを伴って蘇った。

そうなることがわかっていながら、何故今、この状況でここに足を運んだのか。

それは、フェイトにも判らなかった。

過去を振り切りたかったのかも知れず、過去にすがりたかったのかも知れない。

そんなフェイトを迎えるアルトセイムの山や湖は、何を答えるでもなく、ただそこにあるだけだった。

強い目的があった頃には感じたことのなかった不安と、すがれる相手のいない心細さに揺れながら、フェイトは静かに、庭園跡地の周辺を歩いていた。

ふと、フェイトの足が止まった。跡地からほど近い、広く拓けた大地。その一角にある、砕けた巨大な自然石。落雷に焼けこげ、倒れながらも再度枝を伸ばしつつある木々。

その風景が、不意にフェイトの記憶を呼び起こした。

自分の世話係であり、魔法の教師だった優しい女性。

厳しいこともあったが、様々なことを自分に教え、上手にできると必ず褒めてくれた、フェイトにとっては温もりの代名詞とも言える女性、リニス。

砕けた自然石は、リニスが教えた射撃魔法でフェイトが射抜いたものである。

焼けこげ倒れた木々は、リニスが教え、フェイトが修めた雷の魔法が成功した証だった。

教師としての厳しさを演出しようとしてしきれず、どうしても優しく甘くなってしまうリニスの声と笑顔を、フェイトは回想した。

誰より信じていた者に裏切られ、すがっていたものを失い、過去を否定され。

そして、何も守ることができなかった。

なにもかもなくしてしまったような錯覚に囚われていた。

だが、そうではなかった。

ゆるく握っていた小さな掌を、フェイトは静かに開いた。

そこには金の台座に載った、小さな黄色の宝石があった。

どんな時も手放すことのなかった、すでに自分の一部にさえなりつつある大切な品。

フェイトは、やっと気づいた。

戦うことなど好きではないはずの自分が、どうしてあの子との決着を望んだのか。

一度開いた掌を、フェイトは再び握った。

今度は強く、はっきりと自分の意志で。

握りしめられた宝石が、微かに熱を返す。

うつむいていた瞳が、まっすぐに遠い空を見据えた。
迷いはもう、消え始めていた。

同日午前4時50分　海鳴(うみなり)臨海公園

夜が明け始め、朝靄の煙る公園で、ユーノ・スクライアは落ち着かない様子で時計を見上げた。
ミッドチルダ出身のユーノはなのはの友人であり、なのはの魔法の教師でもある。
なのはと同い年の少年であり、淡い栗色の髪は短いが、一見して女の子のような長さで切りそろえられており、その手触りや感触は無邪気ななのはのお気に入りである。
今回の勝負において、最もなのはの身を案じているのは彼だった。
高速魔法戦、まして海上とはいえ空中戦となれば、命に関わる危険な戦闘行動である。
なのはに魔法の力を託した責任があるユーノとしては気が気ではない。
そして、いくら前回の真剣勝負が水入りで未決着に終わっているとはいえ、再戦と決着を望むフェイトもフェイトなら、迷わず受けるなのはもなのはであるという思いがユーノには強い。
しかし同時に、なのはが一度決心したことについて、「危険だから」などといった説得を受けつけるような性格をしていないことも、ユーノはこの二ヶ月あまりの生活で痛感している。

今日もなのはは「少し一人になりたいから」と、決戦の場にユーノを先行させている。
ユーノにしてみれば、決戦の場に罠や危険がないかどうかの調査や、実際に戦闘を行う際、魔法や異世界の存在を知らないこの世界の住民に目撃されたり危害が及ぶことのないように広域結界で戦闘空間を覆うといった作業もあり、先行自体に異存はないものの、それで心配が和らぐわけでもない。
今日何度めかの深い溜息を一つついて、ユーノはまた、周辺空間の調査を再開した。

× × ×

公園を見下ろす位置にある、八階建てのビルの屋上。
そこに一人の女性が佇んでいた。茜色の長い髪を風に揺らし、不安げに空を見上げている。
長身の姿に、犬科の獣の耳と尻尾が揺れる。
ミッドチルダ式魔法で生み出された魔法生物、使い魔。
主より貰った名をアルフといい、彼女はこの名を授けてくれた主との絆を何よりも大切に思い、誇りとしていた。
アルフは今は、その主を待っている。主の決めた約束の時間まであと僅か。
どんなに離れていても通じるはずの精神通話は、今は主が接続を遮断している。
不安ではあったが、同時にこのまま主が来ない方が良いという思いもあった。

だが次の瞬間には、アルフの鋭敏な感覚が転移魔法のゲート発動を感知していた。
屋上のコンクリート床に金色の魔法陣が描かれ、光と共に、アルフの主がその場に降り立った。
金の髪を揺らし、静かな視線を自らの使い魔に向けたフェイトが、小さく微笑む。
「おまたせ、アルフ」
主が笑顔を見せたことでアルフは幾分ほっとして、自らも小さな笑顔を返した。
「向こうの相方は、もう現場に来てるみたいだよ」
「そう」
フェイトが決戦の前に一人になりたいと姿を消したのは昨夜のことだったが、どこに行っているかの察しがアルフにはついていた。
自分とフェイトには、思い出の場所など一カ所かしないのである。
その場所でいくらかは本来の生気と活力を取り戻している様子のフェイトに安堵はしたものの、アルフの不安は消えなかった。
万全の体調で勝負に望んだなら、フェイトは誰と戦っても負けることなどないとは思う。
だが、今日これから戦う相手は強敵である。一撃食らえばそれだけで落ちる可能性がある威力を連発で振り回す砲撃魔導師。
彼女がフェイトのことを心配してくれた優しさや、フェイトのために悲しみ、怒り、懸命になってくれたことについては素直に感謝をしているが、こと戦闘の相手として考えれば、白い防護服に身を包んだその姿は恐怖すら喚起させるものだった。

「あの子は？」
「まだみたいだけど」
主の問いに短く答えながら、アルフはやはり、不安を隠せなかった。
しかしそれでも主が望むことであれば、自分が口を挟むべきではない。
今回の勝負のみならず、フェイトはこれから長く続く人生を戦ってゆかねばならない。
今の不安定で空虚な心境を埋めるのにこの戦いが必要なのであれば、それは仕方がない。
それは使い魔としての思いやりであり、同時に覚悟でもあった。

4時55分。約束の時間の5分前に、なのはは公園に現れた。
土曜日で学校は休みであったが、なのはは学校の制服姿だった。これはなのはにとっての正装であり、襟と背筋を正すための服装なのだった。
なのはは迎えるユーノと落ち合い、短く言葉を交わす。
いつもと同じ笑顔で、いつもと同じ様子だった。

高いポールの上に飾られた時計がゆっくりと時間を刻み、約束の時間が近づいてくる。
秒針が回り、59分が0分になったその瞬間。
空間から滲み出るようにフェイトが現れ、時計の上に立った。

黒いボディスーツに真紅のベルト、風にはためく漆黒のマントの姿は、フェイトの戦闘用防護服だった。

そしてその右手には、刃の中央に黄色い宝石を光らせた、黒い長柄の戦斧がある。

「フェイトちゃん……」

見上げたなのはが、フェイトの名を呼ぶ。

フェイトはそれに答えることなく、ただ静かになのはを見つめ返した。

そして、視線を逸らして小さくつぶやいた。

「来てくれて、ありがとう」

フェイトの不器用な感謝に、なのはが笑顔を見せた。

×　　×　　×

公園のはるか上空の空間に、一隻の艦船が停泊していた。

次元世界を管理する司法機関、時空管理局のＬ級艦船、アースラだった。

魔法や次元世界についての認知のない世界は管理局の管轄外ではあるが、それらの世界で魔法や、異世界産の品物が使用された場合には別である。

先に発生した「プレシア・テスタロッサ事件」はこの世界を中心に発生し、その解決に

尽力したのが管理局艦船アースラのスタッフである。
そのアースラのモニタールームでは、制御卓についた制服姿の少女と、その背後に立つ黒衣の少年が二人で大型モニターを眺めていた。
モニターに映っているのは、現在時刻のなのはとフェイトの二人である。
「しかしまあ、今回の件はクロノくん、例外と特例の許可が多いねえ」
あまり緊迫感のない様子で、制服姿の少女…十六歳にしてアースラの通信主任兼執務官補佐、エイミィ・リミエッタが問う。
「試合のことなら、艦長じきじきの許可が出てるんだ。僕がわざわざ反対することもない」
どこか憮然とした調子で、エイミィより二つ年下の黒衣の少年…クロノ・ハラオウンが答える。
「艦長決定にだって、問題ありそうなら食ってかかるでしょ、普段のクロノ執務官はさ」
クロノは時空管理局の執務官である。
事件捜査や法の執行の権利、現場人員への指揮権を持つ管理職である執務官は、現場では高い権限を持つが、その分優れた知識や判断力・実務能力が求められる。
クロノは着任三年目の若い執務官だが、日々の努力や魔導師としての資質・良き教官に恵まれたこともあり、優れた成績と実績を残している。
プレシア事件でも現場最奥まで踏みこみ、傷を負いながらも崩壊する庭園からなのはやフェイトたちの脱出を助け、事件による被害を最小限に押さえることに成功している。
「やっぱり可愛い女の子相手だと甘くなるのかな？　二人ともクロノくんの好みのタイプ

だもんねー」
そんなクロノを笑顔でからかうエイミィは、クロノとは局の士官教導センター時代からの友人同士である。保護欲が湧くのか生意気な年下で可愛いのか、エイミィのクロノに対する扱いは半ば弟に対するようなものであり、執務官と執務官補佐という部下と上司の立場にあってもその対応が変わることはない。
「仕事中だぞ、エイミィ。真面目にモニタリングしろ」
クロノもまた、そんな部下兼友人の対応については黙認している。
実務一点主義のクロノは任務以外の些末なことにはこだわらないということもあるが、かつての友人に敬語や事務的な対応をされるより、現状の方が居心地が良く、仕事もお互いにやりやすいというのも確かなのだった。
「だから、さっきからしてるでしょ。結界強度の確認も周辺の探査もしてるし、いざという時の非常対応も、3ラインで5パターンも用意してるんだし」
「なら、いい」
「でしょう」
かくして、一風変わった執務官と執務官補佐官は、モニターに視線を向けた。
映し出されている映像は、静かな視線でなのはを見下ろすフェイトと、背負っていたリュックを下ろし、ベンチに置くなのはの姿だった。

対決の開始が、近いようだった。
モニタールームと同じ現地の映像が、ブリッジの大型モニターにも映し出されていた。
中央の艦長席でそれを見ているのは時空管理局提督、リンディ・ハラオウン。
クロノの実母であり、アースラの艦長でもある。
そして同時になのはとフェイト、二人の対決を許可した人物でもある。
プレシア・テスタロッサ事件そのものは、一週間ほど前に終結している。
なのははは事件を解決に導く協力をしてくれた功労者であり、フェイトは事件の準備実行役の疑いがかかっている第一級の重要参考人である。
本来であれば、なのはに対しては功を賞し、フェイトは参考人として本局に送還する手続きがすべて終わっていなくてはならない時期である。
しかし、リンディが自己の権限をもってそれを止めた。
事件終了後、心神喪失傾向にあったフェイトが「心残り」として、なのはとの再戦、そして決着を望んだからである。
事件の最中、なのはとフェイトは幾度か戦闘行動に及んでいる。
互いに憎しみあっているわけではなかった。

ただ、戦っても叶えたい目的がそれぞれにあるだけだった。そして事件が終焉を迎えた今、その目的は消失してしまっている。そんな二人が戦いを望み、そして受けたのには理由があった。

リンディはそんな二人の思いを受け、提督としての責任のもと、いくばくかの打算と希望を抱いて二人の戦いを許可した。

提督として、L級艦船を預かる艦長としての責任は無論ある。

しかし、「事件は解決したら終わりではない」というのが、リンディの持論である。同様の事件の再発を防ぐこと。そして、事件に巻きこまれた人々の悲しみが少しでも和らぐようにすること。そのための許可だった。

打算でものを考える自分にいくらかの寂しさはあったが、それでも最終的に、少しでも不幸になる人が、悲しい心が減るならばそれでいい。それがリンディの偽らざる心情であった。

「…そろそろね」

ぽつりと、リンディがつぶやいた。モニターでは、なのはが今まさに、自らの杖…レイジングハートを起動させようとしているところだった。

なのはの手の中で、小さな赤い宝石が鼓動を刻む。

「レイジングハート、お願い！」
《All right》
掲げた手の上でレイジングハートが輝いてその姿を変え、空間に生じた部品によって「杖」の形をとってゆく。
同時になのはの白い制服がはじけ、新たな衣服がその身を覆う。
数瞬の後には、なのはは全身を純白の防護服に包み、杖化した魔導師の杖・レイジングハートを構えていた。
それを静かに見下ろしていたフェイトは、自らの防護服のマントを風に揺らしながら、手にした黒い長柄の斧…「閃光の戦斧」バルディッシュを構え直す。
それぞれに離れつつ、それぞれのパートナーをじっと見守るユーノとアルフ。
「じゃあ、始めようか？」
凛とした視線を向けながらも笑顔でつぶやくなのはに、フェイトは無言でうなずくのみだった。
「フェイトちゃんとこんな風になるのは、今度こそ最後だから…全力でいくよ。心残りがないように！」
なのはの表情から笑顔が消え、利き手の左手で構えたレイジングハートがフェイトに向けられる。

「うん…決着をつけよう…」
フェイトは感情を押し殺した表情で、しかしなのはの目をまっすぐに見据えてそうつぶやいた。
「決着」が、果たして自分の感情的なことなのか。
それとも純粋に、目の前に佇む少女との勝負の行く末のことなのか。
それは、フェイト自身にもまだわかっていなかった。
だが少なくとも、何かを始めるには、かつてしていたことを終わらせなければならない。
終わらなければ、何も始めることができない。

そしてフェイトに思いつく唯一のことが、理不尽な水入りによって決着なしとなった、目の前の少女魔導師との勝負だった。

「行くよ、バルディッシュ」
《Yes sir》
閃光の戦斧が、常と変わらない無機質な声で主に答える。
白い防護服に身を包み、紅と白金のデバイスを手にしたなのは。
黒い防護服を風になびかせ、黒鋼色のデバイスを構えたフェイト。
同じ年に別々の世界で生まれ、別々に生き。

ひとつの事件をきっかけに出会い触れあい、ぶつかりあった二人。
いずれ劣らぬ魔導師二人。
それが熾烈な戦いとなることは、その場にいる全員が容易に想像できた。
片や圧倒的な威力と長射程、強靭な防御を誇る砲撃魔導師。
片や雷光の迅さで空を舞い、鋼すら切り裂き打ち抜く高速戦魔導師。

だが、そんな危険な戦いに向き合う二人の心は、静かに高揚していった。

なのはにとっては、なんとなく覚えのある。
フェイトにとっては初めての。

それは静かで熱い高揚であった。

一章

高町なのは



五月二十四日　海鳴市藤見町

高町なのはは、天賦の才を持ち合わせた魔導師だった。
本来は魔力の資質を持たず、魔法の存在そのものを知らないこの世界の人間の中にあって、ごく稀な資質に恵まれたが故に魔法と出会い、事件に巻きこまれた。

きっかけは、ごく小さなことだった。
ミッドチルダの住人で、遺跡発掘を生業とする一族の子であったユーノ・スクライア。彼が発見し、移送することになっていた危険な古代遺産「ジュエルシード」それが不慮の事故によって四散し、この世界に散らばってしまった。
責任を感じたユーノは単身それを探すため、この世界へとやってきた。
魔法の腕に多少なりと覚えのあったユーノだったが、単身での長旅と捜索による疲労が重なり、さらにジュエルシードの暴走体は手強く、回収は困難を極めた。
傷つき倒れ、もはや進退窮まったユーノを救ったのがなのはだった。
学校帰り、仲良しの友人とともに通った帰り道で、なのはは傷ついたフェレットを助ける。それは魔力の大半を失い、より低い魔力で負傷を癒すために動物体に変身していたユーノだった。
なのはは、ユーノの「声」を聞き、深夜の町中でジュエルシードの暴走体に襲われていた

ユーノを助けるため、魔導師の杖レイジングハートを受け取って魔法の力を目覚めさせた。
その後のなのはの活躍と成長はめざましく、ユーノはただただ驚くばかりだった。
天賦の才に恵まれていたことは、勿論ある。
しかしそれ以上に、連続する実戦の最中、なのはは努力と鍛錬を欠かさなかった。
そんななのはを気に入ったのか、自らの意志を持つ自律思考型端末、レイジングハートも積極的になのはに力を貸し、なのはもそれに答えるように深い愛情と信頼をもってレイジングハートに接した。
互いの絆はさらに固くなり、なのははレイジングハートをより使いこなせるようユーノの指導を受けて魔導を学び、レイジングハートはなのはの資質に合わせて自らの性能を調整していった。

×　　×　　×

プレシア・テスタロッサ事件の終了から四日あまり。
なのはが戦いで負った少々の負傷と、過度な使用で消耗した魔力はすでに全快していた。
家族と過ごし、毎日学校に通う、そんな小学生らしい暮らしも戻ってきていた。
家人全員が早起きな高町家の朝は、大変に健康的である。
喫茶店を経営する父の士郎と母の桃子は六時前には起きて開店の準備と家族の朝食の支

度をしているし、大学生の長男・恭也と高校生の長女・美由希は、剣の鍛錬をするため五時には起床して走りに行ったり、道場に入ったりしている。
そんな環境で育ったなのはも、早寝早起きの習慣がしっかりと身についている。
今朝も家族五人の揃った平穏な朝食だった。
高町家では「なのはが拾ってきて世話をしているフェレット」という扱いになっているユーノは、母・桃子と姉・美由希には大変に可愛がられており、食事時はテーブルの脇や美由希の膝の上で、一緒に食事をとっている。

なのはが一昨日聞かされた「決着のための真剣勝負」の申し出を受けたのは、自分が思いを寄せ、気持ちを伝えた少女がそれを望んだから、というのが、勿論一番大きい。
二番目には、「自分もあの決着がついていないのはどうもすっきりしてなかった」という思い。そして三番目に、あの静かで寂しげな瞳をした少女…フェイト・テスタロッサに伝えた気持ちについて、フェイト自身に答えを聞かせて欲しい、という思いがあった。
決着がなければ、きっと答えは聞けないから。
そんな理由はなんとも言えず気恥ずかしかったが、気持ちは一度、確かに伝えたのである。答えを聞きたいと思うのが人情であり、女の子である。
「友達になりたい」と思ったという事実に、言葉で理由をつけることはいくらでもでき

る。だが、現在のクラスメイトの親友二人やユーノのことを思うと、友達になりたい、友達でいたいという思いについて言葉で説明できるような理由は、あって困ることこそないが、必ずしも必要なものではないのだという事を、なのはなんとなく感じていた。
友達になれたなら。きっと、いろんな気持ちを分け合える。
抱いている悲しみを、きっとほんの少しくらいなら、やわらげてあげられる。
そして、きっと一日中話しても話しきれないくらい、たくさんの言葉を交わしあえる。

そんな風景を想うと切ないような、胸が高鳴るような気持ちになる。
だから、その気持ちを伝えたのだった。
場所は雷雨の海上上空。敵同士ながら初めての共闘という戦いを終えた直後。
そんな状況にも関わらず、伝えたのだ。
ありのままの、何も飾らない言葉で。

だが、答えは返ってこなかった。
フェイトが返答を避けたわけではなく、外部からの妨害だった。
なのはの中では、ひとつのことを始めようとしたまさにその瞬間に、無理矢理一時停止をかけられているような状態なのだ。
始まらなければ、進めない。

だから始めるのだ。それが戦いであっても、何であっても。
それは、想いに向き合う女の子特有の、ある種向こう見ずな強さでもあった。

× × ×

朝食を終え、なのはは母の手作りのお弁当を受けとって学校に向かう。
なのはの通う聖祥（せいしょう）小学校は、大学までエスカレーター式の私立校である。
幼稚園の時分から勉強に関して優秀であり、勉強好きだったなのはの意志を汲んで、両親がこの学校を選んだ。
小学校が共学、中学以降は男子と女子が別れ、大学では学部ごとに共学だったり別々だったりというこの学舎は、生徒の未来の安定の可能性を高めるかわり、生徒にはそれなりの学力、家族にはそれなりの学費を要求する。
だがそれ故に、通っている生徒たちはいずれもそれなりにきちんとした家の子たちである。
そのため、駅を通って市内を回る通学バスで通学する生徒も多いが、自家用車での送り迎えがある生徒も多く、通学時間帯には校庭を送迎スペースとして解放したり、あらかじめ指定した送迎場所があったりと徹底している。
「なのは！　おはよー！」

「おはよう、なのはちゃん」
通学路を歩くなのはに向かって声をかけたのは、黒いリムジン、キャデラック・フルストレッチの窓から顔を出した二人の少女だった。
一人は気丈そうな蒼い瞳と、茶色に近い金の髪。
もう一人は長い黒髪を純白のヘアバンドでまとめた優しげな少女。
「おはよ、アリサちゃん、すずかちゃん」
なのはは車窓の親友二人に笑顔を返す。

「鮫島、ここでいいわよ。ここからは歩くから」
「かしこまりました、アリサお嬢さま」
このリムジンは、なのはの親友、アリサ・バニングスの自家用車である。
日本とアメリカで幾つもの会社を経営するバニングス家の祖父と両親が、一人娘の通学用にと用意したものである。
落ち着いた、だが素早い動きで運転席を降りてドアを明ける運転手の鮫島は今年で57歳になるベテランドライバーであり、祖父の代からバニングス家の運転手を続けている筋金入りの運転手である。
「ありがとうございました」
そんな鮫島に笑顔でお礼を言って車から降りたのは、月村すずか。

なのはとアリサの親友であり、こちらも工業機器の開発製作を営む会社社長の娘である。アリサの家から学校までの道中にすずかの家があるため、よくこうして一緒に送迎してもらっている。

アリサを降ろし、鮫島が笑顔で一礼して車に乗り込んだのを確認し、三人は並んで通学路を歩き出す。

「今日は朝から体育かー。火曜日はちょっと憂鬱だわー」

と、体操着袋を揺らしながら笑顔でぼやいたのはアリサだった。

「えー、でもいいじゃない。アリサちゃんは体育苦手じゃないんだし」

なのはが笑い返す。

「朝から体動かすと、気持ちいいと思うけど」

おとなしげで線の細い外見に似合わず、運動が得意なすずかが微笑み、二人がそれに笑い返す。

話題はすぐに学校の先生の話や昨夜見たテレビの話に入れ替わり、笑いあう会話のうちに下駄箱を過ぎ、教室に到着している。

それはごくありふれた、小学三年生の女の子たちの朝だった。

事件から、三日が経過している。

授業を受けながら改めて事件のことを思い返すと、なのはは少し怖くなる。



プレシア・テスタロッサ事件は、故意による次元災害発生未遂事件である。
未然に防げたから良いようなものの、一歩間違えば、この世界にも深刻な被害が及んでいたのである。
家族や友人と笑いあう、こんな当たり前の朝が、どこかの世界で起こった誰かの都合で、突然終わってしまうかもしれない。
誰もが知りながら目を逸らしていることではあるが、なのははその事態に直面している。
だが、事件の犯人だったプレシア本人を憎む気には、何故だかなれない。
無論、実の娘であったはずのフェイトを傷つけ、自分の思いのために世界を破滅に導こうとしたプレシアの行為自体を肯定する気はない。
悪い人がいて、その人が正義の味方に倒されれば平和が戻り、みんなが笑顔になる。
そんな事態もあることはあるのだろうが、現実のほとんどはそんな簡単なものではないということをなのはは理解している。
かつて自分が悲しい時にも、冷たい現実に泣かされた時にも、そこには「悪い人」などいなかった。
物心ついて、おそらくは一番人恋しい時期に、ひとりで誰もいない家で家族の帰りを待っていた夕暮れ。

事故が原因で病院のベッドに寝たきりとなり、自分を抱き上げることも出来なかった父。
始めたばかりの店を一人で必死に切り盛りしながら、夫と三人の子供の面倒を見なければならなかった母。剣の鍛錬どころか学校さえ休んで家業を手伝うことも多かった兄。
それらを手伝いながら、なんとかひとりぼっちになってしまうなのはを構ってやろうと懸命だった姉。

帰らぬ家族のことを、祖母に泣きながら訴えたこともあった。
そんな時、父の事故の原因となった相手を憎むのは簡単だった。
だが、憎んだところで悲しみが終わるわけではなかった。
すでに発生してしまったどうしようもない悲しみを止める方法など、そう簡単には存在しない。

そして、今回の事件でいろいろと良くしてくれた時空管理局アースラスタッフの一同、クロノやリンディ、エイミィたちは、そんな現実の中で、法を守り、災害や事件が発生しないよう懸命に尽力している。凄いなと思う部分もあり、そういった仕事に興味もあった。
その感想をリンディは素直に喜び、特例として魔導師としての現地での行動許可を発行してくれた。
魔導師としての才に恵まれたなのはは、保有資質や魔力量の多寡で決められる魔導師ランクでおおまかに判断すると、AAA（トリプルエー）クラスに該当するとされている。

優秀な魔導師揃いの管理局でも全体の5％にすら満たない、希有な才能の持ち主である。

それだけの魔導師となると、本来であれば正式な認可を得ずには管理局の管理外の世界、まして魔法の存在が認知されていない世界には滞在しつづけることができない。

そこを、事件解決の功労や協力に至った経緯、その他各種の裏技を含むあの手この手で、なのはがこれまでの生活を何一つ変えることなく、同時に魔法の力を手放すことなく、管理局と自由に連絡をとりあうことができるよう計らってくれたのがリンディであった。

なのはには込み入った事情はわからないが、その手法にクロノが呆れつつも諦めていたこと、エイミィが楽しげに微笑んでいたことから察するに、相当に強引な手段だったに違いない。

と、制服の上着の下に入れていたレイジングハートが小さく反応した。

音声メッセージの受信がされていた。送信者はクロノである。

なのはがレイジングハートに再生許可を出すと、なのはの心の中にクロノの声が響く。

『時空管理局、クロノ・ハラオウンだ。本日約束していた視察の件だが、別件で少し遅れてしまいそうなので、すまないが30分ほどずらして欲しい。検討を頼む』

今日は正規の機器を使用した魔力測定と、デバイスや魔力資質の正確な調査のため、クロノとエイミィがなのはのもとへ訪れることになっていた。

なのははレイジングハートにメッセージの記録と送信を依頼し、精神通話を始める。

『なのはです。30分遅れ、了解です。学校が終わったらオンタイムの通話を受けられるようにしておきますので、何かあったら連絡してください。それじゃあね』

記録を終了し、送信する。

そういえば、ユーノやエイミィによく「すごい魔力」と褒められたり呆れられたりしていたが、自分の実力がどれくらいのものなのか、なのははよくわかっていなかった。

×　×　×

高台に張られた結界の中で、クロノはなのはの魔法の実使用を初めて間近で見ることになった。時の庭園突入時は別ルートを辿っていたし、それまではモニターで遠くから見ていただけだった。

個人の魔力波長の違いによって異なる「魔力光」の色。なのはのそれは桜色であり、単に波長の違いによって示されるだけの色と、魔導師や魔力性質そのものにはなんの関連性もないのだが、なのはのその桜色の魔力光は、なのはという人格によく似合っていた。

測定器の端末が浮かぶ中、なのはは基本の魔力発露、集束・制御といった検査項目をクリアしていく。その数値は時折異様に高いレベルを示していたが、お世辞にも均整が取れているとは言いづらい。

経緯を聞けば納得ではあるのだが、初めての魔法使用がいきなりデバイスとの強制シンクロと防護服の生成、そしてフルドライブモードを駆使しての暴走体封印作業。
その後もユーノから簡便なレクチャーを受けるのみで、間断なく実戦。
しかも知能の低い暴走体のみならず、自分と同格かそれ以上の実力を保有する魔導師との実戦の連続。
学校の授業から始まる正規の訓練を受けてきたクロノからすれば、一体どんなスパルタなのかと問いたくなるようなハードな道程(みちのり)だった。
だが、それ故になのはの魔法の才能は、すべて実戦向きに叩き伸ばされていた。
近接戦闘はいかに魔法能力が高くともある程度は肉体運用や反射神経の鍛錬が必要であり、実戦形式の練習を含んだ長期に渡る訓練が必要となる。
補助魔法は状況ごとに数が多く使い分けも必要で、極めるには膨大な学習が必要である。この二種に関して、なのはは全くといっていいほどスキルを伸ばしていない。
近接戦闘はほぼ完全に素人であり、補助系に関しては相手の動きを止めるための拘束魔法をひとつ持っているだけだった。
なのはの保有する才である莫大な魔力量と瞬間出力。そして、優れた遠隔制御能力。
それのみを頼りに組み立てられた戦闘法が、現在のなのはのスタイルである。

最大速度と瞬間加速にこそ優れるが、小回りが利かない重い機動。
設置系や時間差系といった小技を使えないため、動きの速い相手には格好の的になる。
その欠点を補助することを、なのはの愛杖レイジングハートはあえてしなかった。
避けるのではなく、受けてそらす。あるいは正面から受けきるという選択。
細かく移動しなければ、攻撃と防御のみに術者も杖も集中できる。
たとえ十発撃たれても、それを耐えきって一発撃ち抜けば逆転できる威力を、なのはの魔法は持っている。
ろくな訓練もないままに実戦に出ざるを得ず、移動と防御、攻撃の切り替えを同時かつ高速に行えるようになるにはもうしばし時間がかかるはずのなのはを想ったレイジングハートが、自らの性能やモードごとの変形機構をそう調整していったのである。

しかし、暴走体相手には通用したその戦術は、二度ほどフェイトによって打ち砕かれている。
一度目は戦いに戸惑うなのはと容赦なく攻撃するフェイトで、勝負にすらならない完敗。
二度目は遠隔の撃ち合いでこそ競り勝ったものの、それ以外の要素で敗北。
一撃必殺に加え、的が小さく機動の早い魔導師相手の戦術が必要だった。
そうして身につけたのが第二の戦術、誘導操作弾の同時複数生成だった。
なのは本人が飛び回るのではなく、発生させた誘導操作弾を舞わせて立体的に相手を追

いつめる。追いつめられないまでも自由な機動を阻害して、その隙を死角から狙撃、あるいは防御ごと破砕する一撃必殺の砲で撃ち抜く。

フェイトとの三戦目までの間に、なのはは必死でその魔法と空間戦略を学んだ。

そうしてやっと、かろうじて互角という所までたどり着いた。

その後は新たな魔法に手を出すことなく、砲と誘導弾という二つの魔法のみの練度を高めることに徹し、状況への対応はその二種の発射形態バリエーションという形で補った。

結果、遠間からの射撃程度では揺るぎもしない圧倒的防御力を持ち、あらゆる方向から変則的な軌道を描いて高速で襲う誘導操作弾を自在に操り、わずかな隙を見せれば一撃必殺の砲で打ち抜く、中遠距離単独戦闘のエキスパート。

そんな一風変わった「砲撃魔導師」が完成していた。

エイミィに促されるまま、なのはは魔法の実使用に移っていた。

「あのぎゅんぎゅん曲がる誘導弾…一発でいいから出してみてもらえる？」

「はいっ」

《Divine shooter》

レイジングハートが応答し、誘導操作弾・ディバインシューターの光弾がなのはの前に

生成される。エイミィは計測機器のキーを叩いて、それを記録していった。
「ありがと、もういいよ。次はあれ撃てる？　リング使って撃つ砲撃」
「はぁい」
砲撃の準備に入るなのはがディバインシューターを消した。

「？」
クロノはその消去シークエンスに、小さな違和感を覚えた。
最も間近で見ていたエイミィが何も気づいていない所を見ると、その場で気づいたのはクロノだけのようであった。
消え方が、何か妙だった。
疑問を確認しようと思った矢先、アースラの乗務員からの通信が入った。
艦に残してきた任務についての質問だった。
応答しながら横目で眺めていた砲撃の消え方も、これまで幾度か見たものは少し違っていたことを確認し、クロノは納得した。
発射後の余剰魔力の拡散について、若干魔法を書き換えたのだろうと。
おそらくは拡散後の魔力をわずかでも再利用し、エネルギー効率を高めるための処理なのだろう。なのはは魔力運用の中でも、集束と放出が特に得意である。
曲がりなりにも魔法学院出のユーノの指導も受けている。誤った運用をするとは思えなかった。

計測が終わり、なのははデータのプリントアウトをもらったが、内訳はやはりよく判らなかった。上に置かれたクロノやフェイトのデータと比べて、自分の数値はひどくバラバラで、極端に高いのと極端に低いのが目立つな、といったことくらいしか判らない。

「じゃあ、あとはもう三日後だね。体はしっかり休めておいてね」

空間モニターを消去して、エイミィがなのはに笑顔を向ける。

「はい」

三日後。まずは、なにはなくとも会うことはできる。

フェイトに対する思いは様々にある。

戦闘魔導師としては、いまだ勝利を得たことのない強敵。

同い年の少女としては、言葉を交わしたい、手を差しのべたい子。

思いを伝え、それを待っている身としては、答えを聞かせて欲しい相手。

あの雷雨の日から、止まったままの二人の時間。

いずれにせよ、すべては三日後だった。

二章
フェイト・テスタロッサ



雷雨がわずかに収まり、雲間から光が覗いていた。
目の前にいるのは、純白の防護服に身を包んだ少女。
左手には白と金の機体に真紅の宝玉を据えた魔導の端末。

少女はまっすぐにこちらを見ている。
まるで、悲しむような。そして、切ないような。
だが、伝わってくるのは弱さではなく真摯な感情だった。
その瞳に見覚えがあるような気がして、すぐに思い直した。
自分にはこれまでたった三人しか関わった人がいない。
世界中の誰よりも敬愛した母。優しい教師。自らが生み出した使い魔。

いま自分の右手にある魔導の端末に、心はあっても瞳はない。
自分の知識の範囲内に、そんな瞳の持ち主はいないはずだった。

白い衣服に身を包み、杖と靴から桜色の魔法光で形成された翼を生やしたその少女は、視線を自分に向けたままゆっくりと唇を開き、言葉を紡いだ。

「友達に、なりたいんだ」

かたん、と小さな音がして、フェイトは微睡みから覚めた。
「あ、ごめんよフェイト…起こした？」
ドアの近くに、掃除用具を手にした、普段着姿のアルフがいた。
フェイトは自分がソファに埋もれて、半ば横になるような姿勢で眠っていたことに気がついた。
「ごめんね…掃除中だったよね」
「いいよ、フェイトは休んでて」
立ち上がろうとするフェイトを、アルフが片手を上げて制した。

海鳴市内のマンションの一室。
フェイトとアルフが、事件の最中に拠点としていた場所である。
ミッドチルダは異世界交易が盛んである。次元港にはさまざまな異世界の通貨への両替が出来る場所が多数あり、この世界のように魔法や次元世界の存在を認知していない世界への調査行が発生することも珍しくない。
無論、それらの世界へ旅立つには管理局の許可や身分証明といった書類や手続きが必要だったが、フェイトの助けになるならとそれらの教育もリニスから受けていたアルフには、その手の偽造は容易だった。
そして、フェイトの母プレシアは、目的を果たすための資金は自由に使って良いと言っていた。
金銭そのものの偽造もできなくはなかったが、それはフェイトが止めた。

無関係な現地の人に迷惑をかけてはいけない。
だが、目的は正しく果たさなければならない。
その折り合いがつく点として、偽造は換金時の証明書と、こちらの世界のこのマンションに入居する際の住民票や身分証明、保証人の偽装、それのみに留めた。
結果として家賃は正しく支払われ、室内も入居時と変わらない清潔さを保っている。信用書類の偽造が悪いことであるということくらいは知っているが、結果として迷惑はかかっていないのだから、もしバレてもあまりうるさいことは言わないで欲しい。
いまだってフェイトの意志のもと、退去前に綺麗に掃除をしようというのだ。
契約家賃先払いの四か月分を、二か月近くも残したままでである。
それらについては、むしろちょっと喜んでほしいくらいだとアルフは思う。

あまり得意ではないが、幼いころからリニスに躾られた掃除の技術はしっかりと身についている。アルフはそれなりに手際よく室内のホコリをはたき、床を綺麗に磨いていった。

フェイトの方を見てはいなかったが、フェイトが立ち上がって掃除用具を取り、あたりの掃除を再開したことが音でわかった。
掃除くらい自分に任せて休んでいて欲しい。
そうは思うが、生真面目で優しい主人の性格もよく知っている。

だからアルフは黙って、床磨きを続けた。

フェイトはベッドルームに戻り、自分のごく僅かな荷物を整理した。
こちらの世界の人間に溶けこめるよう、近所で買ってきた服。
アルフが買ってきてくれた可愛いワンピースは、あまり着ることがなかった。
自分が買ったものなら捨ててしまってもいいが、アルフが選んでくれたものを捨てるのは心が痛む。それにこの世界の服装は、ミッドチルダのものと微細な拵え以外は大筋で大差がない。そして手荷物用にと買ってきた新しいバッグにはまだ十分な隙間がある。
黒と赤のワンピースともう一着、結局袖を通すことのなかった黒いシャツとショートパンツのセットを綺麗にたたみ、バッグの中にそっとしまって、それからフェイトは考えた。

そうか。
ミッドチルダに帰れるとは限らないんだ。

自分は次元災害未遂事件の実行役であり、重要参考人である。
こうしている現在も、建物の外からは管理局の人間が監視を続けており、フェイト達の逃走を防いでいる。犯人と確定しているわけではないので、直接的な行動制限や身柄の拘

束こそないが、それは単に時空管理局提督・リンディの計らいであって、自分が追われる身であることには違いない。

三日後の決戦が終わったら、裁判を受けるために管理局本局に移送されることが決まっている。もしかしたら重罪になって、一生牢屋入りかもしれない。

そんなことをぼんやりと考えながら、それでもいいかな、とフェイトは思っていた。

でもアルフは自分の命令を聞いただけなので許してもらいたい。牢屋暮らしは素体が狼であり、散歩が大好きなアルフにはあまりに酷すぎる。

まだ始まってもいない裁判のことを思い、フェイトは力なく片付けと掃除を続けた。

思えば初めて親元を離れて暮らした場所ではあったが、思い出などなにもなかった。

ただひたすらに目的を叶えるため。母が望んだ祈願の種を集めるため。

戦い続け、傷つきつづけ、疲れつづける日々の中、わずかばかりの休息を取るためだけの仮宿だった。

このマンションにも住民が何人もいるはずだったが、フェイトは結局一度も、誰ともすれ違うことすらなかった。

つまりここの住人にとっては、自分は初めからいなかったのと同じ。

通り過ぎたことにすら気づかない人間だった。

自分が誰からも必要とされていないかも知れないという事実は、向き合えば向き合うほど、暗く重くのしかかってくる。
泣きたいような気持ちではあった。
ただ、そんな状況でどれだけ泣いたところで、少し疲れて、目と鼻が痛くなる以外なにも変わらない。
フェイトは自分が最後に泣いたのがいつだったか、思い出そうとしてみた。
だが、思い出すことができなかった。
いつの頃からか、泣くことをやめていた。
アルフに心配をかけないように笑顔を作ったり、アルフがくれる優しさや愛情に微笑むことはあっても、気づけば心から笑う事もなくなっていた気がする。
母が望んだ目的を叶えることができて、母が自分を優しく抱きしめてくれたなら。
その時こそ、自分は力の限り泣いて、心から笑えるのだろうと思っていた。
もっと幼い頃の記憶を、フェイトは辿ろうとした。
だが、自分の中にある記憶が本当に自分のものであるかどうかすら定かではないことに気づき、また少し寂しくなった。
自分自身でさえ、自分がこの世界を生きた証拠を覚えていないのだ。

どう生きればいいんだろう。
なにをすればいいんだろう。
自分はなんで、ここにいるんだろう。

そんな事を考えるうち、気づけば心配げなアルフが自分のすぐ横にいた。
「アルフ…ああ、ごめん…。わたし、またぼーっとしてた？」
アルフは返事のかわりに、フェイトを静かに抱きしめた。
アルフの腕に抱かれて、フェイトは少し目を細める。
「どうしたの、アルフ」
使い魔と主は精神リンクで接続されており、使い魔は主の感情を鋭敏に察知する。
それでなくとも、今回の事件ではアルフはずっとフェイトのそばにいたのである。
アルフにしてみれば、フェイトの悲しみはそのまま自分の悲しみだった。

「フェイトが本当はどこの誰で、どんな風に生まれたかなんて、あたしは知らない」
アルフがつぶやく。
「そんなの、あたしが生まれる前の話なんだ」
アルフは大人びた外見とは異なり、実際にはフェイトよりも年下である。

病に倒れた子狼を拾い、哀れに思ったフェイトがそれを助けるため、使い魔としての命を与えたのだった。
「あたしが知ってるフェイトは、他の誰でもない。あたしに命と自由をくれて、いろんな事を教えてくれて…いつもそばにいてくれたフェイトだ」
フェイトはリニスと共にアルフを育て、言葉を教え、共に野山を駆け回った。
使い魔は普通の人間の数倍の速度で成長し、主か本人の望む年齢で成長を止める。
アルフが現在の、ほぼ成人の姿で成長を止めたのはフェイトを守るためである。
戦闘魔導師でありながら、か細く脆い印象のあるフェイトを体を張って守るための選択だった。
自分を育ててくれた、優しくあたたかで、一生懸命でひたすらに一途な少女。
親であり、姉であり、親友であり妹でもある。
そんな少女の危機や悲しみを払い、幸福を見守るためにアルフは自分の命があると思っている。
「あたしがこの世界で生きてて欲しいフェイトは、あたしが今抱きしめてる、このフェイトだけなんだ」
アルフの腕に力がこもった。
「アルフ、苦しいよ」
少しの微笑みを浮かべながら、フェイトはアルフの髪を撫でる。

「大丈夫だよ、アルフ。わたしは変なことなんか考えてないし…今は、そんなに悲しくもないし」

フェイトは、自分以外の誰かに優しくするのが好きだった。
もしも自分を頼ってくれる人がいてくれて、その人が自分を好きだと言ってくれて。
心を通じ合わせて、優しさを交わし合うことができたなら。
自分は力と心のすべてを使ってきっとその人を守る。

家族がその対象であることはフェイトにとって考えるまでもなく当然のことであり、アルフもまた、自分にとっては家族以上の間柄だった。

だから守る。悲しい思いをさせたりしない。
アルフがこんな風に心配してくれたり、自分のために悲しんでくれたりするのは、自分がしっかりしてないからである。
精神リンクは、主から使い魔への接続の方がはるかに強い。
自分が弱いと、アルフが悲しんでしまう。
だから、フェイトは笑顔でアルフのことを撫でた。
「きっとまだ疲れが抜けてないだけなんだ…アルフの言う通り、少し休んでいいかな」

そう微笑みながら、フェイトはアルフの抱擁から優しく逃れた。
「うん……横になってるといいよ…。何か食事か、おやつでも買ってこようか？」
フェイトの嘘を察しながらも、それを言及して困らせるのが嫌なアルフもまた、寂しい笑みを浮かべた。
「ん…お願いしていい？」
フェイトの笑みに、アルフが立ち上がった。
と、玄関のドアチャイムが澄んだ音色をたてた。

おそらくは訪問販売か大家だろうとアルフは思った。いずれにせよ、獣の耳と尻尾を揺らした娘の姿では問題がある。アルフはフェイトに「あたしが出るよ」という視線を送りつつ、立ち上がりながら変身魔法を発動する。
光が舞い、アルフは黒髪で小柄な日本人女性の姿を取る。
この部屋を借りる時に使った姿であり、近隣に外出するときは大抵この姿だった。
アルフはその姿で、チェーンがかかっていることを確認しながらドアを開ける。
「はい、どなた？」

「あら…？　ええと…？」
細く開いたドア越しに、驚いた様子の女性がいた。
こちらの世界の装いに会わせた上品なスーツを着こなした、時空管理局提督・リンディ・ハラオウンだった。
「なんだよ…何か用？　三日後までは自由って言ったろ」
仏頂面で答えた小柄な女性の声と発言を聞いて、リンディはそれが誰なのかに気づいた。
「ああ、あなただったのね。変身してるから気づかなかったわ」
「………」
「そんなに身構えないで。ついでがあったから、ちょっと様子見に寄っただけなの」
無言で睨むアルフに、リンディは微笑む。
「おやみげも買ってきてるから、入れてくれないかしら」
そう笑って、リンディは「翠」の文字が入ったケーキの箱を小さく持ち上げてみせた。

「すみません、ちゃんとしたお茶とか出せなくて」
そう謝りながら、フェイトはグラスに入れた紅茶を差し出す。
中身はアルフがフェイトのために買っておいたペットボトル入りのものである。
「そんな、気にしないで。急に思いついて寄ってみただけだから」



微笑んで、リンディはグラスの紅茶に唇をつける。甘味料の入った甘さが、甘党のリンディには嬉しかった。

「いい部屋ね、ここ」

「…………」

この世界の部屋の善し悪しがよく判らないフェイトは戸惑いがちな視線を向けるだけだったが、ふと思い出したように、リンディに小さく頭を下げた。

「あの……改めて、ありがとうございました」

「？」

「わたしのわがままを、聞いていただいた件です」

「ああ」

最初にその話がされたのは、アースラの医務室だった。

事件後、フェイトを見舞ったリンディが今後のことを説明した。今後のことがわからないままだと不安だろうという気遣いではあったが、説明した内容は、やはり少女には重いものだった。

事件の重要参考人としての裁判。フェイトが次元犯罪を自ら行う意志がなかったことは理解できるし、それについて熱心な説得もされている。

しかし、裁判は最低でも半年はかかる。その間はやはり行動に多少の制限が生じるとい

うことをリンディが説明したとき。

心神喪失状態からまだ抜けきっていないフェイトが、ぽつりと聞いたのである。

「あの子とは、もう会えなくなりますか？」

あの子――高町なのは。

「そうね…なのはさんは管理世界外の子だし、管理局の局員でもないから…裁判が始まったら、全部終わるまではちょっと難しいわね」

静かで落ち着いた様子ではあるが、どこか魂が抜けたような空虚な雰囲気のあるフェイトに、リンディは現実を伝えた。

「でも、今すぐ会いたいなら…少しくらいなら大丈夫よ。内緒でだけど」

無論、それも厳密に言えば違法ではある。

だが、事件を任された現場指揮者の責任の範囲でどうともなることでもある。

「会いたい…」

フェイトがつぶやいたのは、意志表示ではなく自問だった。

リンディは静かにそれを見守り、フェイトの次の言葉を待った。

「まだ…終わってないんです…あの子とは……」

それきり、フェイトの言葉は止まってしまった。

リンディは二人の出会いについては知らないが、経緯については報告を受けているし、決意で望んだにもかかわらず決着が水入りで終わってしまった戦いや、フェイトがこのように心身喪失状態になってしまった出来事についてはリアルタイムで目撃している。

「終わらせたいの？　あの子と、ちゃんと」

優しく、リンディはつぶやいた。

「…………」

自分を見つめ返すフェイトの瞳に、かすかな明かりが灯ったことをリンディは見逃さなかった。

「終わらせるには、どうしたらいい？」

「…………」

リンディの問いに、フェイトは視線を落として考える。

数分間は黙ったままだったが、リンディは答えを急かすことなくただ待った。

「約束…だったから……」

元は、なのはが提案したことだった。

散らばっていたジュエルシードの捕獲がすべて終了した時点で、なのはとフェイトはそれぞれが半数程度ずつを保有していた。

それぞれにすべてを得なければならないなのはとフェイトは、後は互いに戦いあうしか

なかった。
その時点で、なのははフェイトの境遇を知っていた。
フェイトの扱いについてプレシアに提言したアルフが、プレシアに攻撃を受けて重傷を負い、一時的になのはたちの所に身を寄せた時に聞かされたのである。
なのはは決意した。
もとより、白黒はっきりしないまま物事を進めるのが苦手な性格である。
二人が出会ったきっかけであり、今はフェイトの呪縛となっているジュエルシードの回収。フェイトを助けたいとか、友達になりたいとか、そういったことを始めるより先に、まずはジュエルシードの問題を二人で片づけてしまいたい。そうしなければ進めない。だから、互いが持つジュエルシードすべてを賭けて真剣勝負をしたい。
そんななのはのまっすぐだが滅茶苦茶な提案を、現実味のある案に翻訳したのがユーノとクロノだった。
この勝負でなのはが勝てばそれでいい。ジュエルシードのすべてはなのはと管理局の手に渡り、フェイトも保護することができる。
そしてなのはが敗北し、フェイトがジュエルシードを得たなら、フェイトは必ず本拠地であり、事件の黒幕であるプレシアの元に帰還する。
勝負の前後や最中に逃走経路に徹底して網を張り、帰還先を突き止めてプレシアを押さ

えれば、事件の根本が解決する。
なのははその作戦を了承し、フェイトに戦いを挑んだ。
勝った方が、すべてのジュエルシードを得る。
なのはが伝え、フェイトは頷いた。
それは二人の間に交わされた、最初の約束だった。

だがその約束は、達成の途中で壊された。
事態を察知したプレシアが、別次元からなのはを攻撃したのである。
傷つき意識を失ったなのはから、収納された杖ごとジュエルシードを奪うよう命じた母の命令に、フェイトは躊躇(ちゅうちょ)してしまった。
そうするうちになのははユーノのサポートで意識を取り戻し、包囲の網も完成した。
プレシアは仕方なくフェイトと、フェイトが持ち出していたジュエルシードの約半数のみを回収したのである。
その後は管理局一同、そしてなのはとユーノの時の庭園への突入といった事態が続き、事件の終焉まで慌ただしく時が過ぎた。
フェイトはその際に知った事実で心を砕かれ、そのまま今日に至る。

フェイトの時間が止まっているのは、そこからだった。
包囲網が敷かれていることはわかったが、アルフとの連携でそれを抜く手段はいくつか考えていた。勝利していれば、たとえ自分が捕獲されても全てのジュエルシードを母の元に届けることだけは出来ていたはずだった。
フェイトが勝利を納めてジュエルシードを持ち帰ったところで、最終的な結末はそう大差のないものだったに違いない。
むしろ、フェイトとしてはかえって苦しく悲しい結果になっていたかもしれない。
母から告げられた事実がある以上、そのことはよく理解できた。
そして、母の魔力攻撃に撃たれた時の、あの白い服の少女の奇妙な機動。
まるで上空からの攻撃にわざと当たりにいくような動きだった。
あり得ないことではあるが、その少女が、自分をかばうような機動だった。
もしかしたら、あの時の攻撃は、外部からの管制を受けているが故に遠隔攻撃をいち早く察知できる…つまり、命中率が低いであろうあの少女ではなく、次元跳躍攻撃が自分に向けて放たれるとは夢にも思わない（実際に思っていなかった）自分を狙ったものではなかったのか。

答えが欲しかった。

なにもかもが曖昧で、なにもかもが幻のような自分の今に、唯一答えを出せる可能性があるのがあの少女との再会であり、対話であり、結末だった。

言葉で話せる自信はなかった。

酷い事をした自覚がある。自分やアルフを助けてもらった恩義もある。問いかけてもらった言葉がある。

もう何も望みたくない、なにも考えたくないはずの自分の中で、ほんの僅か残った思いと願いがそれだった。

途中で止まってしまった約束を、最後まで果たしたい。

自分の疑問に、答えが欲しい。

それが終われば、自分はきっと、自分の言葉で彼女と話をすることができる。

長い長い沈黙の後に、フェイトは思いを言葉にした。

「約束だったから…あの勝負に、決着をつけたいんです」

×　×　×

「上手く叶えられそうで、良かったわ。約束して上手くいかなかったら、大人として恥ずかしいものね」

琥珀色をした甘い紅茶に口をつけて、リンディが笑う。

「すみません」

そう、フェイトは視線を落とす。

「なんで謝るの？　話を聞きにいったのは私なんだし、あなたは思ってることを言っただけでしょう」

「…………」

「あなたがどう思ってるかはわからないけど…今回の事件に関しては、あなたも被害者よ」

フェイトにとっては意外な言葉が、リンディから発せられた。

「あなたみたいに小さな子にとって、親の願いや命令がどれだけ大切で逆らいがたいものかってことについては、法律がちゃんと証明してるの」

就業可能年齢が低いミッドチルダであっても、親に命じられて子供が犯罪を犯すような事例については、子供を守る法が整備されている。

自由な思考や一般常識を身につける機会を阻害するような…たとえばフェイトのように社会から隔離された環境で育った子供であればなおさらであるが、反面、自らの意志で悪意を持って犯行を行ったとされれば、子供であろうと容赦なく裁かれる。

「プレシアがジュエルシードを収集していた理由について、あなたは何も知らなかったでしょう？」
こくん、とフェイトがうなずく。
「あとは…ジュエルシード集めのために、物や建物を壊したりした？」
フェイトが小さく首を横に振る。
「誰かを傷つけたり、殺したりした？」
「…あの子に……何度か怪我をさせました」
「なのはさんね…。聞いてみたけど、「おあいこですから」だそうよ」
実際、なのはの魔法で、フェイトは幾度か軽い傷を受けている。
「あなたはきっと頭のいい子だから、自分のしてることが悪いことって自覚はあったと思うわ。でも、たとえそうであっても、お母さんのためにって思ってた」
「母親の願いを叶えてあげたくて、人に迷惑をかけるかもしれない、って思いながら、それでもなるべく迷惑をかけないように、一生懸命、必死になって探しものをして」
「…………」
「あなたの使い魔さんもそうよね？　ご主人様が一生懸命してることを、一生懸命手伝った」
ちら、と自分を見るリンディにアルフはなんとなくバツが悪く、そっぽを向いた。

「何も知らされずに、母親のために一生懸命に働いていただけの子供を罪に問うほど、時空管理局は冷徹な集団じゃないわ」

リンディはフェイトに微笑みを向けて、フェイトはその笑みに少し戸惑った。

「まあ、裁判っていうのは公正かつ厳密でないといけないから、あなたがそんな子で、次元災害未遂事件については何も知らされてなかった、って事実をきちんと説明して、証明していかないといけないの」

リンディは、グラスに残った紅茶を飲み干した。

「長くかかるし、悲しいことも思い出さないといけないし……時々辛いこともあるわ。だからこっちにやり残しとか、後悔を残して欲しくないの」

「………ありがとう…ございます…」

うつむきがちながら、フェイトは小さく感謝を伝えた。

「ん」

リンディが微笑むと、いつのまにか背後に来ていたアルフが、空になったグラスにペットボトルの紅茶を注いでいた。

「ああ、ありがとう。甘くて美味しいから、つい全部飲んじゃってたわね。ええと…？」

「アルフ」

バツ悪げに、それでもアルフは自分の名を伝えた。

「ん…ありがとう、アルフ」

注いでもらった紅茶を飲みつつ、リンディは話を続ける。
「裁判の資料準備は、うちのクロノ執務官がやるわ。ぶっきらぼうだし、ちょっと頭が固いところはあるけど、なんだかんだで話のわかる子よ。仲良くやってくれたら嬉しいわ」
「はい…」
フェイトはただ、戸惑いながらもうなずくしかなかった。
「さて…こっちの世界だと、そろそろ食事時ね。二人とも、食事はもう？」
「あ、ええと…」
驚いたフェイトがアルフを見て、アルフは「見られても」といった様子で慌てる。
「まだみたいね。じゃあ気分転換もかねて、外に食事に出ましょうか？　折角だから、クロノやエイミィの事もちゃんと紹介するわ」
言うが早いかリンディは紅茶を飲み干して立ち上がり、空間モニターを出して呼び出しを開始する。
フェイトは困惑したが、モニターに映ったエイミィと笑顔で会話するリンディを見る限り、いまさら断ることはできそうにないことを察した。

「どーするの…？」
「…………」
行くしかなさそう、というフェイトの視線を受けて、アルフが複雑な表情をする。

「まあ、あたしは肉が食えればなんだっていいんだけどさ…。あー、外に出るなら変身解くんじゃなかった」

出かける前に出しっぱなしの掃除用具を片づけようと、フェイトは立ち上がった。

そして、なにげなくゴミ箱の底を覗きこんだフェイトの表情が、かすかに曇った。

アルフがそれに気づいて慌てるが、もう遅かった。

「アルフ…だめだよ、わたしのもの、勝手に捨てちゃ」

フェイトはゴミ箱からそれを取り出し、埃を払いながら優しくアルフを叱る。

「でもさ…そんなの、もういらないじゃんか……」

しょんぼりと、アルフがうつむいてしまう。

フェイトには、アルフが何故これを捨てたのかがよくわかった。

だがそれでも、自分は今これを捨ててはいけないような気がしていた。

「おまたせ……あら、どうしたの？」

通話を終えたリンディが、フェイトの手の中にあるものを覗き込んだ

それは、一枚の写真が収められた小さな写真立てだった。

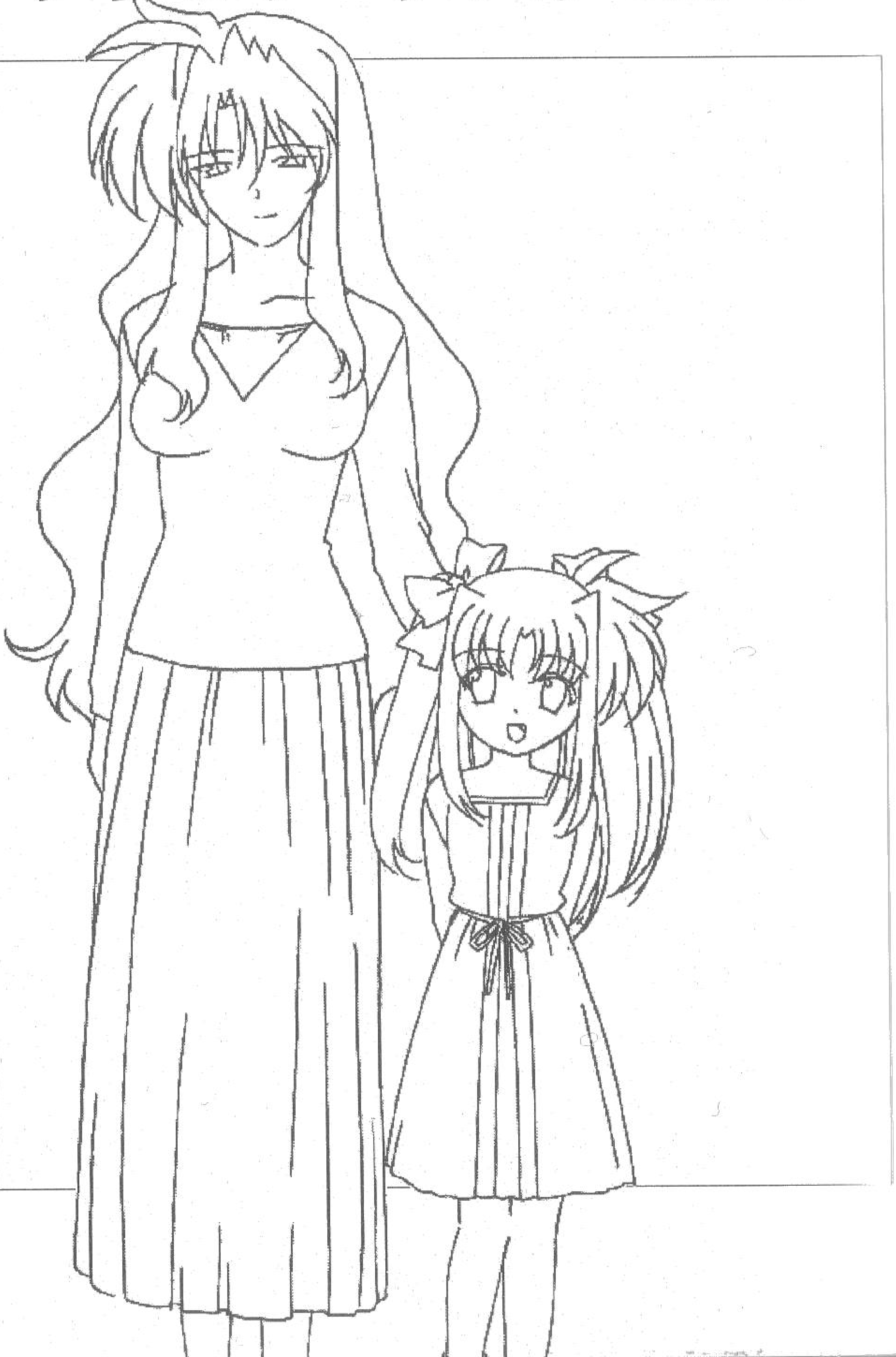
黒髪の優しげな女性と、金髪を二つに結った可愛らしい少女の写った写真だった。

母プレシアと、幼いころのフェイトの写真。
リンディにはそう見えたし、フェイトもアルフもかつてはそう思っていた。
「そんな写真…とっといたってしょうがないじゃんか」
視線を逸らしたまま、いらだちを隠そうともせず、アルフが言う。
フェイトは片手でアルフの背中を撫でてやりながら、静かに答えた。
「母さんとアリシアの思い出…もうこれしか残ってないんだよ」
写真に写った人物は、プレシア・テスタロッサと、もう一人。
「寂しい思い出でも…とっておきたいんだ…」

アリシア・テスタロッサ。

彼女のために、フェイトは造られたのである。

三章
プレシア・テスタロッサ



プレシア・テスタロッサは、すでに全てが憂鬱になっていた。

時の庭園、大広間である玉座の間の豪奢な椅子に腰掛けながら、プレシアは口元の血を拭い、苦しい呼吸を続けている。

眼前の鏡面モニターには、空と海の戦場と、突然の状況に困惑するばかりの失敗作が映し出されていた。

何の間違いか、失敗作を狙ったはずの次元跳躍攻撃は、交戦相手の白い防護服の少女に命中してしまった。

ある意味では予期せぬ好機であったため、失敗作に少女の杖を……願いの種が収められた魔法の端末を奪うように命じた。

だが失敗作は愚かにもそれを躊躇(ためら)った。

かつてはわざわざ一流の教師をつけて魔法と戦闘を教えこみ、その後もプレシア自らが鞭打って教えたことを、なにひとつ出来ていない。

鞭の傷で痛みとともに刻んだはずの記憶は、あの失敗作から綺麗に抜け落ちてしまっているようだった。

そして、続く命令を出そうとした矢先にプレシアは激しく咳きこみ、モニターや次元間

通信の維持が出来なくなってしまっていた。

次元跳躍攻撃は、凄まじい量の魔力と体力を消耗する。

結界を抜き、網を張った管理局の哨戒で止められない速度で、なおかつ精密に小柄な人間を狙い撃つ精度を持たせるに至っては、並の集中力と魔力でできることではない。

肺腑を破るような激しい咳がやっと収まった時には、プレシアの口中は喉の奥から溢れた熱く苦い血液で溢れかえっていた。

再度点灯し、映像と音声の再生を再開したモニターの中では、白い防護服の少女は仲間に助けられて意識を取り戻していた。

その周囲では、待機していた武装局員が次々と現れ、失敗作とその使い魔の逃走を防ぐために空中に散開し、捕獲のための陣形を組んでゆく。

やはり、失敗作は所詮失敗作だった。

この程度の命令すら遂行することができない。

プレシアの心中には、苛立ちよりもむしろ諦めが先に立っていた。

一縷の望みを駆けたひとすじの希望も、もはや思い通りにはなりそうもない。

先の次元跳躍攻撃で、この庭園の位置も補足された。

すぐに局員たちがやってくる。
その前に、最後の可能性に賭ける時間程度はあるはずだった。
ぜい、ひゅう、と、出来の悪い笛のように鳴る喉を広げて、なんとか呼吸をする。
もはやただ座っているだけで失われてゆく魔力と体力も、まだもうしばらくは保つ。
失敗作に持たせたジュエルシードを回収しなくてはならない。
切れ切れの息をどうにかつなぎながら転送魔法を起動する。
プレシアはここひと月あまり、ほとんど眠っていない。
末期にさしかかりつつある死の病は、その保有者に安らかな眠りすら許さない。
しかし朦朧とする意識の中、それでも身についた魔導の技は乱れない。

こんなはずではなかった。

自分がすでに正常と狂気の分水嶺を越え始めている自覚は、意識の片隅にかすかにあった。
自らを永遠の闇に連れ去ろうとする死。
正常な思考を奪い取ろうとする狂気。
その狭間でプレシアがかろうじて壊れずにいられるのは、ひとえに自らの願い故だった。
何と引き替えにしても、取り戻したいものがあった。

だがやはり、自分はすでにずいぶん昔から狂っているのかもしれないとも思う。
それは途方もない願いだった。
しかし、自分が本当に狂っているのでなければ可能性はあるのだ。
そのための願いの種であり、今回の計画だった。
これまでの試みはすべて失敗した。自分に残された時間も、もはや残り少ない。
転送魔法が発動を開始した。
すぐにあの失敗作が転送されてくる。
次の計画などもはやない。これが最後の賭けだった。
その前に、自分の手元からあの失敗作を捨ててしまうことをプレシアは決意した。

かすかに、意識が途切れかけた。
病に斃(たお)れてしまわぬよう、罪の意識と後悔に狂ってしまわぬよう。
懸命に意識をつなぎながら、プレシアは片時の夢を見る。
夢は、いつも同じだった。
プレシアがすべてを捨てても取り戻したいもの。
それは魔導工学研究者、プレシア・テスタロッサとその一人娘、アリシア・テスタロッサ。二人で暮らす、ただ平穏な日々だった。

× × ×

ミッドチルダ中央から少し外れた地。
山と緑の一角を切り開いた、工場や実験施設が並ぶ広大な工業地帯。
当時のプレシアはそんな工業地帯の会社で、魔導工学の研究開発者としてのキャリアを着々と積み重ねている時期だった。

プレシアは二十三歳で結婚し、二十八歳で一児を授かった。
生活のすれ違いから、アリシアと名づけた一人娘が二歳の頃に夫とは別れてしまったが、幸い魔導研究者は高給であり、いくらか生活の自由もきいた。
大らかな上司と気心の知れた同僚たちの配慮にプレシアは助けられ、仕事を続けながらも一人娘を育てていくことができた。

アリシアは四歳をすぎるとすっかり活発な子になり、研究所の人気者になってしまった。
大人相手にも物怖じしない明るい性格は多くの所員たちに可愛がられ、父親不在をまるで感じさせない、人見知りしない陽気な子になっていった。
五歳の頃には、研究所近くで拾った薄茶毛の山猫を飼い始めた。

本来は人になつかないはずのその種の山猫が、何故かアリシアとプレシアにはよくなついた。
猫の名は、アリシアが「リニス」とつけた。
一日の仕事を終えて疲れたプレシアが家に帰ると、アリシアと飼い猫リニスが明るく出迎えてくれた。
アリシアは左利きの小さな手で母の家事を手伝いながら、一日の出来事を笑顔で母に話し、リニスは猫らしい奔放さでいつも二人の心を和ませた。
週末の楽しみは、親子と猫で出かける静かな山へのピクニックだった。
山の季節ごとの風景の中、リニスは野山を駆け回り、親子はお弁当と景色を楽しむ。
プレシアは幸福だった。
悩みと言えば、季節の変わり目にはリニスの抜け毛が多くて掃除が大変なこと。
アリシアが時々聞き分けのない我が儘を言うこと、どうやら勉強があまり好きではないらしいことくらいだった。
現在の仕事、現在の家、現在の生活。そして飼い猫と愛娘。
プレシアはすべてを愛していた。
そして、ずっとこんな風に時が続くのだと思っていた。

影は、一枚の辞令から落ち始めた。
プレシアがあるプロジェクトの設計主任として抜擢されたのである。
それは新型の、大型魔力駆動炉だった。
ただし、一からの設計ではなく他者からの引き継ぎであり、現状進行している部分までは生かして、残りの部分のみを仕上げるようにとのことだった。
他人の設計を途中から引き受けるのはトラブルが多い。まして大型機器であり、さらに大エネルギーを扱う駆動炉は極めて危険な代物である。
十分な引き継ぎ期間が必要なはずだったが、スケジュールがそれを許さなかった。
さらには、前任者の杜撰(ずさん)な資料管理、複数の人間が何度も変更した様子がある設計やシステム、絶対的に足りない日程に、プレシアとそのチームは毎日悪戦苦闘と悲鳴の日々だった。
帰宅は自然と遅くなり、アリシアは寂しげな表情を見せることが多くなった。

×　×　×

そもそも初めから不可能領域にあったスケジュールは、進捗(しんちょく)を眺めた上層部によって幾度も修正・見直しが行われ、その度に新たな機能やシステムの追加案が一方的に出された。
なんとか組み上げたものが台無しにされ、なぜそんなものが必要なのか判らない機能を追加させられる。依頼元の大手メーカーから直接降りてくる命令であり、新人主任のレベ

ルではそれらに反論する権利すら与えられていなかった。
疲労と心労が重なり始めたチームをプレシアはなんとか励まし、懸命に開発を続けた。
この厳しい仕事をなんとかクリアできれば、プレシアはかねてよりの希望だった管理部門に転属できることが決まっていた。
管理部は残業や休日出勤がいくらか少ない。
責任は大きくなるが、それだけの働きをする自信がプレシアにはあり、周囲もそれを認めていた。
自分と幼い子一人、猫一匹の家庭にとっては、家族の時間は宝物である。
アリシアが好きな週末のピクニックにも、もう少し大きくなったらきっと行きたがるであろう様々な遊興施設にも、ちゃんと連れていってやれるようになる
だからこそ、この仕事は問題なくやり遂げなければならなかった。
しかし、開発に終わりが見える気配はいつまで経っても訪れなかった。
上層部からの無茶な要求や、次々に入れ替わる指示や一方的な決定。それらに嫌気の差したチームスタッフたちは一人、二人と現場を離れてゆき、プレシアはそれらの事後処理と再度の計画見直しに追われ続けた。
そして、本部から訪れた新たな人材が、プロジェクトの内情を支配し始めた。

「主任補佐」の肩書きで、立場上はプレシアの部下となっていたが、彼が現場を支配した。
本来は綿密な摺り合わせと厳重な確認が必要なはずのチェック機構は、彼の手によって何項目も削られた。立ち入り調査がない安全基準については、事実上無視するよう指示が出された。
プレシアはそれに反対し、強く抗議した。
現在開発している駆動炉は、つい最近理論が確立されたばかりの新たなエネルギー変換機能を使用している。いくら安全基準や確認を無視して完成させたところで、事故や破損が起こっては期間も費用も大きく無駄になり、信用も落とす。
度重なるそんな説得も、依頼元にはすべてが無視された。

主任補佐の遂行した「効率化」によって、プレシアが進行していた時よりも開発の進行が良くなっていたからである。
チームスタッフたちもその効率化には強い反対を示し、プレシアの意見が通るよう尽力したが、強い態度で望んだ者たちはすべて異動され、主任補佐の関係者が後釜に座った。
プレシアはそれでも諦めることなく、懸命に安全確認を行い、事故だけは起こらないよう最善の注意を払った。
大魔法をも扱う魔導師だからこそわかる、巨大な力を扱うことへの畏怖。

魔法であれば、数十ある術式をほんの一行程間違うだけで暴発することがある。

まして、その駆動炉に使用されるエネルギーは、大気中の酸素を消費して魔力を生み出す新機軸の燃料であり、正式認可はいまだに疑問視されている危険物である。大規模な駆動炉に至っては、安全確認をしすぎて困るなどという事は一切ない。

駆動炉の実機制作が始まり、プレシアは研究室を離れて工場近くの開発室に詰めることになった。

自宅からは遠いため、会社に申請して開発室の一室を寮として借り受け、アリシアとリニスも一緒にそこで暮らすようになった。

自宅近辺よりも自然の多い土地故にアリシアとリニスの遊び場は増えたものの、すぐ近くにいながらもほとんど一緒にはいてくれない母に、アリシアの寂しさはつのった。

かといって疲れ切った様子の母にワガママも言い切れず、おやすみのキスの後は背中を向けてすねてしまうくらいしかできなかった。

そんなアリシアを抱きしめつつ、プレシアは願っていた。

開発が終わったら、少し休暇をもらうこと。

今回の駆動炉に関しての実績は、主任補佐があらかた持って行くはずである。

それに関してはとやかく言わない。管理部勤めはもう少し先でも良い。

なんなら、仕事を変えても良いのである。

修士課程を終えた一流の魔導師であるプレシアは、勤め先に困ることもない。

とにかく、たった一人の娘に寂しい思いをさせたくない。

プレシアは毎夜そう思っていた。

開発は、報告書上では順調に進んだ。

実機が組み上がり、燃料を入れての稼働実験まであと僅かとなった。

もはやほとんど安全チェック選任となっていたプレシアとそのチームだったが、燃料実験直前には、実機への接触が事実上禁じられていた。

疑問に思いながらも、設計図と確認書での安全チェックを続け、現場の工員に対しての安全基準マニュアルの作成に努めた。

その精度は上層部にも認められ、プレシアは特例として、主任職の他に「安全基準責任者」という役職を受けた。

素直に喜ぶ気にはなれなかったが、最初の稼働実験の終了と確認後、5日間の休暇が約束されたのは嬉しかった。

だが、その事故は誰もが予想しない形で、誰もが予想しえない規模で発生した。

稼働実験のための燃料注入の際、機関の一部が勝手に稼働を始めたのである。
プレシアはその時、修士生だったころの友人を集め、稼働時の危険を防ぐための防御結界の展開指示を行っている最中だった。
プレシアは確かに、燃料注入は結界の展開が終わってからにするように伝えた。
しかし、主任補佐は、遅れ始めた稼働実験の時間を効率よく修正するため、まさか危険があるとは思えなかった燃料注入を前倒しにしたのである。

プレシアが事態に気づいた時には、すでに機関の6割が稼働を開始していた。
緊急停止コードも受けつけなかった。
そうして、その時初めてプレシアは気づいた。
自分が申請し、書類上は受理されたはずの安全措置が、ほとんど何も成されていないことに。
絶望しながらも、プレシアとそのスタッフはなんとか機関の暴走を停止しようとし、このままでは爆発の危険のある駆動炉を、あらかじめ確保してあった安全地区へと転送することを申し出た。
しかし、上層部と主任補佐は、転送を不可とした。
停止はできるはずであり、転送してしまっては再度実機の作り直しとなる。
暴走させせないため、危険をなくすための安全基準をプレシアが作っていたはずであると。

プレシアは後にこの時のことを夢に見て、後悔と憎しみで幾度も悶え苦しむことになる。
退職させられようと、賠償金を支払うことになろうと、転送してしまえばよかったと。
この時が、プレシアが自らの運命を選ぶことができた最後の選択肢だったのである。

結果は、ごくあっけなかった。
強制停止のための反応装置が、具体的な引き金となった。
本来その駆動炉が生じるはずの莫大なエネルギーは、予想を遥かに上回る破壊力を持って駆動炉を破壊し、その衝撃で工場内部は酷い被害を受けたが、かろうじて張られたプレシアたちの結界により、見学者やスタッフたちは被害の第一波を逃れることができた。

燃料だったエネルギーは付近一帯に爆散し、目を開けているのもつらいほどの金色の魔力光に包まれていた。エネルギーのすべてが反応を得て光と温度に変わっているのである。付近はまるでサウナのような暑さだったが、正しい反応法でも特定濃度でもないため、熱や爆発による二次被害はないように思えた。
だが次の瞬間、プレシアや魔導エネルギーに詳しいスタッフは慄然とした。
エネルギーのすべてが反応しているのである。

そしてそのエネルギーは酸素と反応し、酸素を消費して光と熱に変わっている。
自分たちが張っているのは、大気中の毒物や粉塵にも対応できる完全遮断結界である。
だが、外の生物は。

寮の一室で、アリシアとリニスはいつものように、遊び疲れて居眠りでもしているかのような姿でいた。
アリシアは部屋のソファにもたれるようにして横になり、リニスはその足もとで前足を伸ばすような姿勢でうつぶせていた。
その脇には、先行していた医療スタッフが携帯用の酸素マスクを手に無言でうつむいていた。
プレシアは寮の部屋にも万が一に備えて防御の結界を張っており、爆発や災害がアリシアやリニスに被害を及ぼすことがないよう気遣っていた。
だが、酸素に反応する微粒子状のエネルギーはそれとは無関係に結界内に入りこみ、付近の酸素を食らいつくしたのである。
さらに肺から吸いこまれた微粒子は、血中の酸素とすら反応する。
おそらくはわずか数呼吸、苦しいと思うより先の死のはずだった。

プレシアは娘と猫を見下ろし、まるで呼吸ができなくなっているような感覚に襲われていた。いまだ付近の酸素が薄いというのはもちろんある。
だがそれ以上に、目の前の現実を受け入れることができなかった。
なにが起こったのか、何が起こっているのかが、うまく理解できなかった。

ふと、プレシアはテーブルを見た。
子供用画材が散らばっているその脇に、アリシアのスケッチブックが落ちていた。
プレシアが見せてと頼んでも、恥ずかしいのかアリシアはなかなか見せてくれなかったスケッチブックだった。
プレシアは呆然としたままそれを手に取り、開いた。

そこには、子供らしいつたない絵が何枚も描かれていた。
ケーキやクッキーといったお菓子の絵や、リニスをスケッチしたらしい絵があった。
だが、ページのほとんどは、ある女性の絵で埋まっていた。
「おかあさん」と脇に書かれた、優しく微笑むプレシアだった。
数瞬の間をおいて、プレシアは声にならない声をあげた。

何かが壊れたような、まるで永遠に続くようなそれは、すでに声ではなく、慟哭だった。

×　×　×

事件の原因究明に、管理局が立ち入ることはなかった。

安全基準の設定ミスは安全主任であるプレシアにかけられ、それに断固抗議したプレシアは会社を告訴し、事件については裁判で争われた。

しかし、裁判でプレシアに勝ち目はなかった。

安全基準を担当したのはプレシアであり、それを管理しきれていなかったのも事実だった。そして社は告訴を取り下げれば、プレシアの刑事責任を訴えることをせず、不幸な被害にあったアリシアについての賠償金を支払うとの意志を示した。

逡巡の末にプレシアはそれを受け入れ、ミッドチルダ中央付近から姿を消した。

事件については、プレシアが違法な手段で、違法なエネルギーを用いて行ったものであり、安全確認よりもプロジェクト達成を優先した、という形で記録が残ることとなった。

その後、プレシアは地方で魔導研究に従事するようになる。

プレシアが就いたのは、当時は研究者の間で話題になっていた研究だった。
なにかに取り憑かれたような没頭ぶりで次々と成果を上げていくプレシアに、新しい職場の同僚は恐怖すら覚えていた。
数年間のうちにいくつかのプロジェクトを成功させ、プレシアは作業成果と特許料によって大きな富を得、いつの間にか職場から消えていた。

プレシアが欲していたのはある研究のための資金であり、ノウハウだった。

アリシアの賠償金と自ら得た富により、プレシアは移動庭園を購入した。
以前の持ち主によって「時の庭園」と名づけられたそれは遺跡級の年代物であったが、動きさえすれば問題はなかった。
アリシアとリニスの遺体は、保存液で満たしたポッドに厳重に納めていた。
「遺体の保存」であれば、より永時性の高い保存法もあったが、アリシアを遺体扱いする気はプレシアにはなかった。
死んではいないのだ。ただ、眠っているだけなのだ。
保存液で眠る愛娘の目覚めを得るため、プレシアは時の庭園内部でひたすら研究に没頭した。
最初は、極小生物から始めた。

次には昆虫。爬虫類。そして、小型のほ乳類。
プレシアが達成しようとしたのは命の創造と再生だった。
そしていずれの動物でも、プレシアはそれらの創造と蘇生に成功していた。

だが創造自体は使い魔の生成と大差がなく、誕生するのはあくまで魔法生物である。
蘇生も、死の直後でごく短時間であれば可能であったが、完全に死亡し終えたものを蘇らせることはできなかった。

「生命蘇生」は魔法における最大の不可侵領域である。
不可能領域と言い換えても良い。
魔法は、自然摂理や物理法則をプログラム化し、それを任意に書き換え、書き加えたり消去したりすることで作用に変える技法である。
生命を稼働中のプログラムとするなら、死はそれを完全に消去してしまう作業である。
数行壊した程度ならば修正も可能だが、莫大なソースをすべて完全に消してしまった状態から、同じ状態で復帰させることはできようはずもない。
そしてプログラムが消えた瞬間に、プログラムを走らせていた容れ物も壊れる。
壊れた容れ物には、どんなプログラムを入力しても動くことは決してない。
動かすことは不可能ではないが、それは糸をくりつけたり機械を入れたりして動かす

のとそう大差のない行為であり、元の姿を取り戻すのからはほど遠い。
それが、魔法という技法から見た「死」の概念である。

そこでプレシアが考えたのは、任意のプログラムを書きこむことが可能な「新たな容れ物」としての人造生命の開発。そして、その人造生命への記憶転写だった。
方法はあった。
こんなことのためにではなかったが、アリシアの記憶はある程度保存してあった。
素材としてアリシアの体細胞を使用し、できあがった体にアリシアの記憶を与える。
アリシアの記憶を持ち、生前と変わらぬ姿を持つならば、それはプレシアにとっても、アリシアにとってもアリシア本人のはずだった。
人造生命研究の職に就いていたころ、開発チームはこの研究を「プロジェクト F.A.T.E」と名づけていた。
プレシアはその後の研究を合わせ、わずか数年で完全なる素体を完成させていた。
ポッドで眠るアリシアと寸分違わぬ姿。
培養液に浸かりながらも、静かに呼吸をするその体にアリシアの記憶を転写され、「容れ物」は「新たな命」として目を覚ました

プレシアは悲願の達成を心から喜び、「アリシア」が全ての記憶を取り戻し、これまでのように微笑み始めるより先に、リニスの蘇生を行うことにした。

同様の方法で蘇生を行っても良かったが、猫の寿命はさほど長くはない。
この方法で蘇生させた命は、本来の生命と同程度の寿命しか生きないのである。
いずれ訪れるリニスの死にアリシアが悲しむのは見たくなかった。
だから、主が生きている間は、完全破壊されるか契約破棄をしない限りは命を続ける、使い魔とすることにした。
より賢く、より主の心を汲む良きペットとするべく、プレシアはリニスを自らの使い魔として蘇らせた。

やっと戻ったかと思った「親子」の関係に、翳りが落ちるのは早かった。

様々な事が、違っていたのである。
蘇った「アリシア」はいまだ意識が曖昧なままながら、簡単な会話程度ならすることができた。
声は、寸分違わぬアリシアの声だった。
だが、喋り方にいくらかの違いがあった。
何がどう、というわけではない。単に意識がはっきりしないだけなのかもしれない。

しかし違和感は消せなかった。
プレシアは、「アリシア」を喜ばせたい一心で、使い魔として蘇らせたリニスを見せてみた。だが、「アリシア」はリニスのことを覚えていなかった。
懸命に説明しても、「アリシア」はきょとんとするばかりだった。
だが、それでもおとなしくしている猫がかわいいのか、右手を伸ばしてリニスの頭を撫でた。
プレシアは愕然とした。
この「アリシア」は右利き・・・・・・・・だった。
それでも目の前の少女がアリシアであって欲しい一心で、さまざまなことを教え、思い出してくれるよう懇願した。

だが少女が記憶していたのは母との楽しい思い出ばかりであり、母に対して抱いていた深い愛情のみだった。

そして、数日が過ぎた時点で違和感は確信に変わった。
アリシアが受け継ぐことのなかったプレシアの魔力資質が、少女には正しく受け継がれていたのである。
そして、少女の魔法光は金色だった。雷光の煌めきのごとく美しく輝くその色は、プレシアにとっては自分から全てを奪った、あの忌まわしい光の色と同じに見えた。

もう、駄目だった。
目の前の少女が遠慮がちな笑みで自分を見上げる視線も、アリシアにそっくりな姿も、金色の魔法光も、すべてが自分の失敗を証明し、嘲笑っているかのようだった。
そしてこの「アリシアではない何か」は、自分の愛情やアリシアの過去を奪い取ろうとする、得体の知れない悪鬼のごときなにものかに見えた。

プレシアは一度少女を眠らせた。
そして、アリシアから転写した記憶のうち「自分がアリシアと呼ばれていたこと」を削除した。
なにかのきっかけでそれを思い出すことはあるかもしれないが、そんな事はもはやどうでもよかった。
廃棄してしまっても良かったが、曲がりなりにもアリシアの姿をした者を手にかけることは出来そうになかった。
そして、自分の魔力資質を継いでいるなら「使える」とも踏んだのである。
今回の方法が駄目だったとなると、ここから先はもはや明確に違法・禁忌の術となる。
そのための実行役が欲しかった。
幸いにして、少女は自分を母だと思いこんでいる。
それを利用すれば、懸命に働くだろう。
そういった意味では、いちいち詳細に命令をせずとも自律的に行動できるという性能も

有り難い。

だが、それらの実行役として、一通り戦技や魔法を使えるようにするための教育者がいる。

ふと、足もとの猫が自分を見上げているのに気がついた。

きちんと座り、命令を待つかのようにじっとおとなしくしている薄茶の山猫。

そうしてプレシアは、もう一つの失敗に気がついた。

アリシアが拾ってきた本当のリニスは、こんな猫ではなかった。

主人の都合など考えずに足もとにじゃれつき、所かまわず背中を擦りつけて抜け毛を散らかす。気が乗らなければ呼んでも来ないが、来て欲しくない時にはよく甘える。

そんないかにも猫らしい猫だった。

だがいま足もとにいる、主人を思い、主人のために行動することのができる魔法生物は、リニスの姿こそしているが「リニスではない何か」だった。

使い魔にするということは、つまりはそういうことでもあった。

アリシアの偽物と、リニスの偽物。

偽物同士、まとめて放っておけば良いということにプレシアが気づくまで、そう時間はかからなかった。

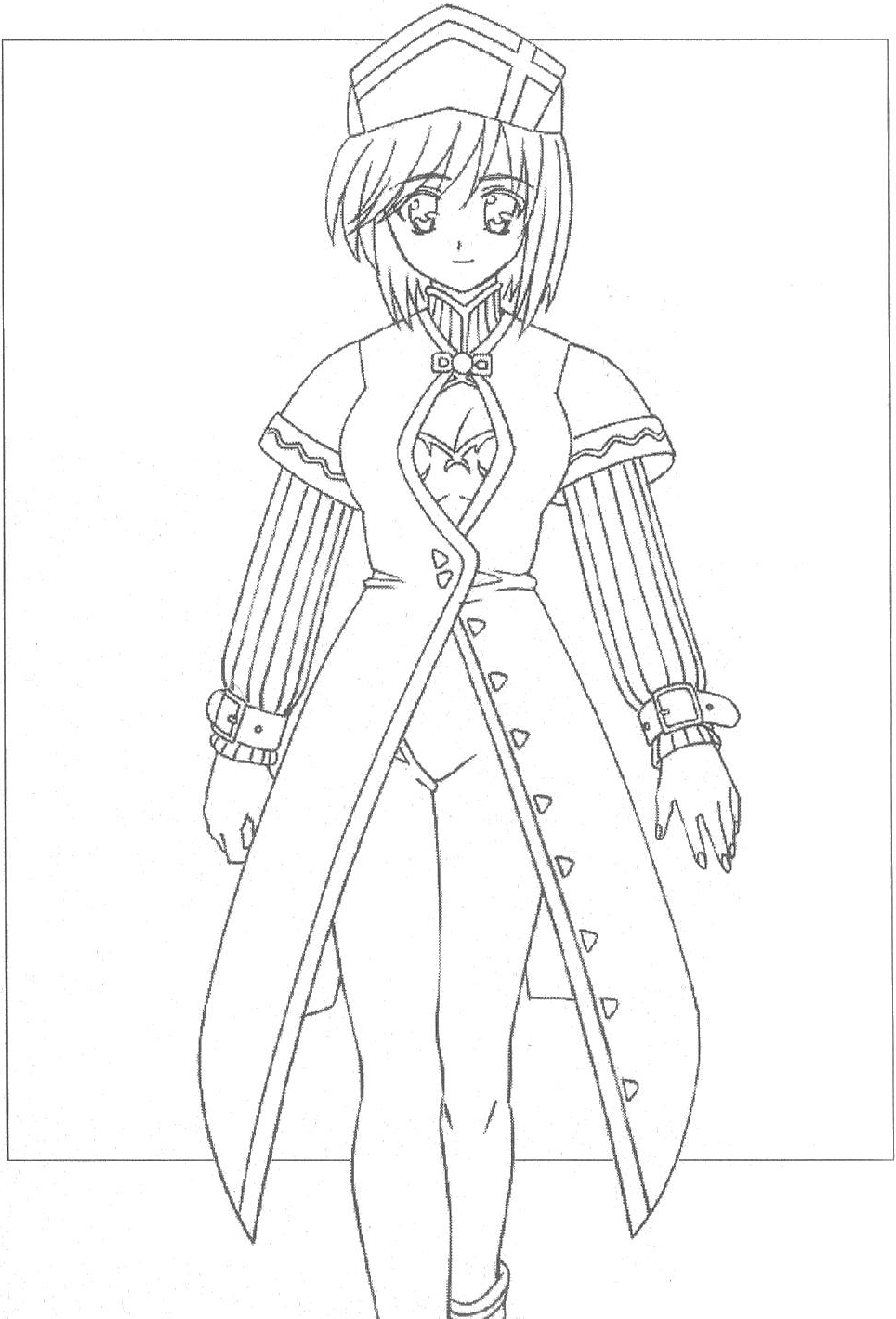
人間を育てるのに比べ、使い魔を育成するのははるかに容易である。
自らの知識と技術を圧縮して送りこむことで、上手くすればひと月あまりでほぼ完璧に近い使い魔が完成する。
プレシアの魔力を受け継ぎ、プレシアが保有している多くの魔法や知識を操る教師。
維持は大変だが、ずっと生かしつづけることもない
育成が済んだ時点で契約を終了して消滅するよう契約すれば、面倒も減る。

そうして作成したリニスに人の姿を与え、あの偽物を育てさせればいい。
独立した人格を持つであろう使い魔に事情のすべてを説明するのは面倒だったし、妙な忠誠心を持って自分の目的を邪魔されたり、離反されても困る。
真実を伝えることなどない。
研究で忙しい間、自分の娘の面倒を見て一流の魔導師に仕上げて欲しい、と命ずれば、もとが母性の強い山猫である。愛情を持ってあの偽物を育て上げるだろう。

あの偽物をアリシアと呼ぶのは嫌だったが、名前がないというわけにもいかない。
数秒考えて、プロジェクトの名「F.A.T.E」…フェイトとでも呼べばいいと気づいた。
名前を考えてやったりしては、まるであの子の親のようではないか。

アリシアは自分のたった一人の娘であり、妹などいない。
自分とずっと、二人で暮らすのだ。
プレシアはこれからの具体的な計画を思いながらも、アリシアが蘇った時、自分の隣にリニスがいないことの言い訳をなんと言うかを思案していた。
新しいリニスを用意すれば、アリシアは笑ってくれるだろうか。
アリシアの笑顔を思って、プレシアは胸の奥から数年ぶりの笑いがこみあげてくるのを感じていた。
プレシアは、すでにゆっくりと狂い始めていた。

四章
リニス



プレシア・テスタロッサの使い魔、リニスは迷っていた。

使い魔として誕生してからの細かい年月は覚えていないが、現在の意識を持って主と相対した最初の記憶からは、すでに二年以上が過ぎようとしている。

時の庭園の廊下にかつかつと靴音を響かせて歩く背筋はぴんと伸び、視線はまっすぐに前を向いている。彼女の生真面目で気丈な性格は、そんな姿勢にもよく現れていた。

使い魔は通常、素体となった動物の末端的特徴を露出しているが、リニスはそれをしていなかった。肩の上あたりでそろえた薄茶の髪の上部には、服と合わせてしつらえた帽子がちょこんと乗っており、山猫の耳はその中に。ふさふさとした尻尾は背中側の衣服の下にきちんと仕舞われていた。

なんとなくではあるが、それらを露出していることが恥ずかしかったのである。

自分の主人は甘えられるタイプの人ではないし、自らには明確かつ厳粛な使命がある。

そんな自分が本来は気ままな動物が素体の使い魔であるということを露出して歩くのは、それらに対する責任感と相反する。

そんな思考があるのかもしれない、と、リニスは冷静な自己分析をしていた。

だがリニスの悩みとはそんな些末なことではなく、より深刻なものだった。



現在、庭園はミッドチルダ辺境、アルトセイム地方の山間に停泊している。
緑豊かなこの地は子供の情操教育や、野山を駆け回る健康な暮らしには持ってこいである。
そして、そんな緑の草原を、いまは二人の少女が走っている。
「あ、リニスだ…リニス〜っ！」
明るい大声を出したのは、長く伸ばした茜色の髪と、狼の耳と尻尾を揺らした少女。
「どうしたの？　リニスもお散歩？」
次いで、その後を追っていた金髪の少女もリニスに笑顔を向ける。

「そんなところです…二人はまたかけっこを？」
「うん！」
リニスの問いに、二人の笑顔が返ってきた。
フェイト・テスタスロッサと、その使い魔アルフ。
リニスの知識では、フェイトは今年七才になる。主プレシアの一人娘であり、プレシアの魔導の才を正しく受け継いだ才能溢れる魔導師の卵だった。
年のわりに落ち着いた子で、手を焼かされることなどほとんどない。
「リニス、今日のおやつは？」
「もう作ってありますが、まだ内緒です」
そんなフェイトの使い魔、アルフは実に奔放な性格である。

人間の姿に変身できるようになって半年あまり。どうやら言葉を普通に喋れるようになり、暇さえあればフェイトとあたりを駆け回って遊んでいる。

アルフの背丈は最近やっとフェイトと同じくらいになったが、リニスはアルフのがっしりした骨格や大きな手足を見るたびに、じきに自分がアルフを見上げるようになるだろうと思いを馳せる。

使い魔の成長は早いので、それもおそらくは今年中の話だろう。

「勉強の時間は、まだだよね？　もう少しアルフと遊んでていい？」

自分を見上げて微笑むフェイトに、リニスは微笑みを返す。

「もちろんですよ。ケガにさえ気をつけてくれれば」

フェイトは運動能力にも優れ、飛んだり跳ねたりも得意ではあるが、本人の嗜好としてはどちらかというとインドア派であり、勉強好きのようである。

外での遊びは、運動訓練をかねてアルフの遊びにつきあっているという印象も強い。

それでも、二人で遊んでいるとフェイトも子供らしい笑顔を見せるので、リニスにはそれが嬉しい。

アルフを使い魔とする前のフェイトは、本当に子供らしさに欠ける子供だった。

おとなしく、礼儀正しく、遠慮がち。

かと言って過度に人見知りをするわけでもなく、内にこもることも少ない。「なんて大人びた子だろう」というのがリニスのフェイトに対する印象だった。
生活を共にするうち、子供らしい欠点や抜けた所なども発見でき、それはそれで微笑ましかったのだが、やはり子供らしく明るく笑うことの少なさが気になっていた。
今はアルフがいるおかげで、二人でいる時は屈託なく笑うが、やはり、もう少し子供でいて欲しいように思う。
そして、フェイトが子供らしくない原因はフェイトの母親…つまりリニスにとっては主にあたる人物、プレシアに問題があるように思えてならない。

リニスが意識を持つようになってからこの方、プレシアはほとんど研究室から出ることもなく、ひたすら研究に没頭している。それだけ忙しいから、フェイトの世話や教育をするためにリニスを使い魔としたという話は聞いている。
そしてフェイトの話によれば、プレシアはとても優しい母であり、こんな風に忙しくなる前はいつもピクニックに連れて行ってくれたし、一緒に遊んでくれたと言う。
そしてある程度仕事が忙しいのは昔からであり、自分が寂しがってわがままを言ったりしてはいけない、というのは、フェイトがずっと思っている事であるとも言う。
それでも心配するリニスにフェイトは「今、こんな風に母が仕事に没頭しているのは自

分がある程度成長したからであり、同時にリニスという信頼のおける使い魔ができたからで、それは寂しいことでもなんでもない」などとリニスに心配をかけまいとするのである。
ここ二年あまり、顔を会わせることすらほとんどなく、優しい言葉をかけることなど皆無な冷たい母親を、それでも一途に慕い、敬愛しているフェイトを見ると、リニスはどうにも胸が切なくなる。

プレシアの現状は、わからないでもない。
なんの研究をしているのかは知らないが、おそらくはある程度時間に制限があり、なおかつその成果が極めて重大な意味をもつ研究なのだろう。
だがそれにしても、親一人子一人の親子なのである。
せめて一緒に食事をしたり、なにげない会話を楽しんだりして欲しい。
それが普通の親子ではないか、とリニスは思うし、実際にそれは何度もプレシアに伝えている。だが、プレシアは研究室のモニターから顔すら上げる様子はない。

そんな事が重なり、最近ではプレシアとリニスの間柄も上手くいっていないのである。
プレシアにしてみれば、自分の使い魔が自分より娘を大事にするような態度は確かに面白くはないだろうし、つっけんどんな主に対して、つい小言めいた口調でものを言ってしまう自分も良くないとは思っている。

プレシアは、リニスとの精神リンクを完全に切っている。
故に、リニスはプレシアがどんな感情で、何を考えているのかはわからない。
一年ほど前から、急激にプレシアの体調が悪くなっていることも気にかかる。
時折ひどく咳き込むことがあり、咳止めの薬湯が手放せなくなりつつある。

使い魔の身で、主の事情に立ち入る気はない。
だが、使い魔が望むのはどんな時でも主の幸せ、それが最優先である。
何か意固地になっていたり、やるかたない事情で親子関係が上手くいっていないのであれば、それを解消する手助けをしてあげたい。
それは偽らざるリニスの本心だった。

× × ×

その日もリニスはフェイトとアルフを連れ、付近の野原に出かけていた。
野原の片隅にある砕けた大きな岩は、フェイトが射撃魔法で撃ち抜いたものである。
フェイトの戦闘資質は、連射性に優れた固く鋭い射撃攻撃と、身軽な機動性を活かしての高速戦。そして、おとなしげでか細い外見からは予想もつかないほどに研ぎ澄まされた近接戦闘の能力だった。

パートナーとなるアルフも同様の性質を持ち合わせつつ、補助魔法にもきっちりリソースを振ったバランスの良い出来になりつつある。
反面、二人とも高速機動に頼りすぎて防御が弱いところがあった。
「それがあなたたちの欠点であり、攻撃においても見落としやすいところです」
リニスは告げるが、そう言うリニスも防御系の出力はさほど高くない。
これは資質の伝達元であるプレシアからしてそうなので、テスタロッサの一族とその使い魔に共通する性質なのかもしれない。
「リニス、もうちょっとわかりやすく」
「あなたたちは絶対的な防御力の持ち主との戦闘経験が少ないので、対処法を学びづらい、ってことです」
アルフの質問に、リニスは冷静に答える。
「二人とも細かい攻撃を重ねたり、防御を抜いたり崩したりしての一撃がほとんどですからね」
「でも、フェイトも砲撃覚えたよね、どかーんな奴」
「サンダースマッシャーだね」
フェイトが微笑む。先月習得したばかりの砲撃魔法であり、現在のフェイトの最大威力攻撃である。
「残念ながら、あれも固い相手が万全の体制で防御したら、おそらくは簡単に防げます」

リニスの断定に、微笑んだフェイトの表情が凍る。
それなりに苦労して得た魔法である。それが使えない技では非常に困る、という思惑が手にとるようにわかり、リニスは苦笑する。
「砲撃は防御の隙を抜くか、防御の上から魔力を削るのが基本です。素早いあなたは見せ技やタイミングずらしに使うという選択肢もありますし、あれを持ってることは戦略の幅を広げる上で非常に重要ですが…それ以外の手も必要だってことです」
「それ以外…」
新たな魔法を教えてもらえそうな気配に、フェイトの目が輝きを帯びる。
「フェイト。ランサーを出してみて」

リニスの言葉にフェイトは立ち上がり、すっと右手を上げる。
フェイトの掌の上に金色に輝く魔法の球が発生し、ぱちぱちと小さく放電する。
フェイトが最初に覚え、そして最も得意とする射撃魔法、フォトンランサーの発射体である。
自分の周囲に発生させたこの発射体から、槍のように鋭く伸展させた魔力を発射する、シンプルだが強力で使い勝手のよい射撃魔法である。
「最大で、いくつ同時に出せる？」
「うーんと…」
フェイトが目を閉じてぐっと集中すると、小さな光球が続けて二つ発生する。

「ふ…普通に打とうと思ったら……これが…精一杯……」

発射体三つの維持だけでも、相当に辛いようである。フェイトの声が震える。

「うん…あ、もう消していいですよ」

リニスの声にほっとしたようにフェイトは発射体を消す。

「あなたの絶対防御対策は、いまのの延長です」

リニスは静かに言葉を続けながら、自分の周囲にフォトンランサーの光球を発生させる。

ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ。

「単純な射撃魔法をひとつの目標めがけて嵐のごとく雨あられ…簡単に言えばそうなりますね」

唖然とするフェイトとアルフの前に、リニスは二十近い発射体を並べて見せた。

「最低三十発の発射体から、フォトンランサーの一点集中連射…これを防ぎきれる術者なんて、まずいませんん」

「でも…難しいね」

フェイトはうつむいた。自分の性能的に、「早く動くこと、動かすこと」と「鋭く研ぎ澄ますこと」は得意だが、同時発動や遠隔操作が苦手であるという自覚がある。

フォトンランサーも直射のみであり、誘導制御の性能や四発以上の複数発動は想定していない。

威力と速度を維持しようとすると、どうしてもリソースが追いつかないのである。

最低三十発というのは、気が遠くなるような鍛錬をしても実現が難しい数字な気がした。

「まあ、自分一人で達成しようと思ったら、かなり難しいでしょうね…。そこで、デバイスの出番です」

つぶやいた言葉に、フェイトとアルフが同時にリニスを見る。

「普段の魔法をより高速にスムーズに発動させ、体ひとつではリソースが足りずに制御が困難な大魔法を支えるのが、魔法のデバイス…杖の役目です」

リニスは笑顔で言葉を続ける。

「今、作ってるんですよ。フェイトの杖を」

× × ×

リニスの自室の一角にしつらえられたテーブルに、それは仮組状態で置かれていた。

数本のコードで据え置き端末に接続されたその鋼色の機体は、長い柄と斧状の尖端を持っていた。

その姿を見て、アルフが不平を漏らす。

「うえ…杖ってゆーか…これ、斧？　なんかフェイトのイメージと合ってなくない？」

「失敬な。ちゃんと考えての選択です。「バルディッシュ」という立派な名前もあるんですよ」

リニスは言い返しつつ、据え置き端末を操作する。

と、斧状の尖端が、柄と接続された円盤状の部品を中心に機械音を立てて回転した。
「斧だけでなく、状況に合わせて変型もします。基本形は戦斧で、あとは鎌と槍ですね。武器として使えるのはもちろん、フェイトの魔法の補助もします」
フェイトは期待と好奇心の入り交じった視線で、いずれ自分が手にすることになるデバイスを見つめる。
「いまはまだ生まれたばかりですが、この子には心もありますし」
「インテリジェントデバイスなの？」
フェイトがつぶやく。自律思考の能力を持つ端末を、ミッドチルダの魔導師たちは「インテリジェントデバイス」と呼ぶ。
状況判断を行い、その場に最適な機能を自動起動し、主に合わせて自ら性能を調整する。優れた知性を持つ機体であれば、その調整機能は自己進化とすら言える発展性を見せることもある。
術者自らがインテリジェントデバイスの思考を理解し、二つの意志がひとつとなった時、１＋１の力を5にも10にもする可能性を秘めている。
反面、完全に術者の思い通りになるわけではない性質を嫌う術者も多く、相性が悪かったり術者の力が足りなかったりすれば、「杖に使われている術者」や「言うことを聞かない杖」といった状況になり、互いの能力を殺し合ってしまう。

「わたしに使いこなせるかな…」
何気ない不安を、フェイトが漏らす。
「使いこなすだけの能力を持っていることは、確かに大事かもしれません。でも一番大事なのは、この子の思いを理解してあげることです」
リニスは端末を操作しながらフェイトに微笑みかける。
「折角ですから…挨拶をしてあげて、フェイト」
「あ、挨拶って…何を？」
「軽く撫でてあげて…あとはこんにちはと、自己紹介と、何か一言を」
リニスに促され、フェイトはバルディッシュに向かい合う。そして鋼色の柄から先端部にかけて、優しく触れてゆく。
「えと…こんにちは、バルディッシュ…。フェイト・テスタロッサです」
ちかちかと、接合部の水晶が淡く明滅する。
「わたし、あなたの持ち主にふさわしい魔導師になれるように努力するから……一緒に戦ってくれたら嬉しいな」
「思ってることを伝えてくれたら…わたし、頑張ってそれに答えるから」
せわしなく水晶が点滅し、数瞬の間を置いて、バルディッシュの尖端がジャキンと戦斧の形態を取り、電子音声を発した。
《Yes me too》

「しゃべった!?」
突然の発声に、フェイトとアルフは飛び上がらんばかりに驚いた。
「しゃべりますよ。インテリジェントデバイスですから」
感嘆の目でバルディッシュを見つめるフェイトだったが、バルディッシュは先ほどの発声後は水晶の光も消してしまい、完全に沈黙を保っていた。
「この子が完成するまでは、もうしばらくかかりますが…。今日からは、デバイス使用を前提とした訓練メニューに切り替えましょう」
「うん！」
インテリジェントデバイスの扱いは難しい。
だが、バルディッシュを手にすることで、フェイトは飛躍的にその能力を高める。
リニスはその事について、確信めいた思いがあった。

× × ×

夏が過ぎ、秋が来た。
アルフの手足はすっかり伸び、フェイトもまた人間としても魔導士としても順調に成長し、すでに一流の技を身につけつつあった。
射撃魔法フォトンランサーは同時4発生成に加え、単発での連射モードを習得した。

大威力砲撃サンダースマッシャーは呪文詠唱不要レベルまで練度を高め、近接戦闘では長柄の杖の先に魔力刃を発生させての槍技が冴え渡った。
持ち合わせていた高速機動能力はさらに高まり、もはやリニスもアルフも、最高速度のフェイトを補足しきる事はできなくなっていた。

その日も、リニスはいつものようにフェイトとアルフの食卓を整えた。
魔法の授業をよく頑張ったご褒美に、フェイトの好きなデザートも用意してあった。
配膳を終え、二人の「いただきます」を見届けてからプレシアに食事を運んでゆくのが、リニスのいつもの日課だった。
そんなリニスを見送って、フェイトとアルフは食事をしながら笑顔で会話する。
「今日の練習もバッチリだったし…課題魔法は、あと二つだっけ？」
香草を使ってこんがりと焼いた魚を頭からかじりながら、アルフが笑う。
「うん。広域雷撃魔法と…あとは設置型拘束」
フェイトはフォークを上手く使い、魚の身を綺麗に取りながらつぶやく。
「設置型拘束か…アレ、おまけがいっぱいついてるから難しいんだよね」
「遠隔型だし、副効果が多いし…公式も展開式も複雑だからね」
「でもま、フェイトならコツを掴めばすぐだよね。問題は広域雷撃か」
「うん…でも、それが上手く行ったら…」

拘束と雷撃の二つを習得すれば「卒業」という話を、フェイトはリニスから聞かされている。卒業の祝いは、先日ついに完成したインテリジェントデバイス、バルディッシュの授与である。

そして一撃必殺の魔法は、バルディッシュと二人で学ぶ最初の魔法になる。

それも嬉しかったが、リニスを通じて聞かされていた、母の期待に答えられるという事が何よりも嬉しい。

敬愛する、優しい母である。近頃は自分に姿を見せることもなく、優しい態度を取ってくれることもないが、大好きな母である。優しい笑顔は胸の中にあり、甘やかしてくれた掌の温もりは昨日のことのように思い出せる。

ここ二年ばかり自分に厳しく接しているのは、自分がもう子供ではなくなったからであり、自分が魔法の勉強と練習を始めたからだと、フェイトは自分に言い聞かせている。

母の研究が忙しいのはもちろんあるだろうが、強くなるためには甘えがあってはいけないという話も良く聞く。

血を分けた親子である。

どんなに冷たい態度を取られたところで、自分が嫌われているなどとは思わない。

そんな事を思ってはいけない。フェイトはそう信じていた。

「まあ…うまく行くといいやね」

アルフは優しく、主に微笑みかけた。

×　×　×

食事と薬湯をトレーに載せ、リニスはいつものように研究室の鉄扉をノックした。
研究に没頭して返事がないのはよくあることだったため、リニスはその時も無断で研究室へと入った。だが、機材や書籍、書類が散らばった研究室の中に、主の姿はなかった。
席を外しているのはそれほど珍しいことではないが、リニスはなんとはなしにいつもと違う気配を感じていた。
リンクを切られているとはいえ、使い魔と主の絆は深い。リニスは自分が感じた違和感を杞憂で終わらせるべく、普段は禁じられているプレシアとの精神通話を試みた。
『プレシア…プレシア、今どこですか？』
何度か呼びかけ、返事を待ったが、主の声が戻ってくることはなかった。
違和感は即座に不安に変わり、リニスは食事のトレーをテーブルに置くと、すぐさま探索の魔法を発動した。
「プレシア！」
リニスがプレシアを発見したのは、庭園の地下だった。

玉座の間のすぐ側にある、掠れた字で「保存室」と書かれた部屋の入り口に、うつぶせて這うような姿勢で倒れたプレシアをリニスは抱き起こす。
「プレシア、しっかり…！」
咳はしていなかったが呼吸は細く速く、床と口元には喀血したらしい赤黒い血が見えた。
リニスは携帯していた薬湯のボトルの封を開け、プレシアの口元に運ぶ。
プレシアはかろうじてそれを口に含むが、再度襲った咳によって、それは吐き出されてしまった。
濁った血と混じりあった薬湯が服を汚すのにも構わず、リニスはプレシアの背中をさすり、ゆっくりと薬湯を飲ませた。
「大丈夫です…落ち着いて…ゆっくり…」
炎症を抑え、気道を広げる働きのあるその薬湯の速効性分により、プレシアの呼吸は徐々に落ち着きを取り戻してゆく。
ひと安心したリニスは、なにげなく暗い保存室の奥へと目をやった。
壁にそって高さ1メートルあまりの保存ポッドがずらりと並び、その内の多くに透明度の高い青緑の液体が満たされていた。
そして、最奥にあるポッドには、液体の他に白いなにかが入っていた。
リニスの素体が猫でなければ、あるいは見通すことができなかったかもしれない。
だが夜を見通すリニスの瞳は、それが何であるのかをはっきりととらえてしまった。

「……見たわね……」
喘鳴する呼吸の中で、プレシアがつぶやく。
「プレシア…あれは……」
翡翠色の液体の中、胎児のように膝を抱えたポーズで浮かんでいたのはアリシアの遺体だったが、リニスにはそれを知る術もない。
「あれは…フェイト…？」
その瞬間、プレシアの瞳が千切れるほどに見開かれた。
「違うわ！　あの子は、あんなモノとは！」
リニスを掴んだプレシアの指の力は病人のそれを明らかに越えて強く、爪はリニスの柔らかな腕に深く食い込んだ。
「私のアリシアを、あんな失敗作と一緒にしないで頂戴！」

同時に、プレシアによってリニスへの精神リンクが最大レベルで接続された。
その瞬間、リニスは全てを理解した。
プレシアの記憶、プレシアの過去。アリシアの存在、フェイト誕生の理由。
そして、自分の過去と生まれた理由。
嵐のように渦巻いた、黒くよどんだ感情はすべて主のものだった。
怒り、憎しみ、悲しみ、後悔。

純粋な負の感情のみで構成されたそれらの内に埋まった「希望」の正体に気付いて、リニスは愕然とした。

そして、プレシアはそんなリニスをふりほどくようにしてよろよろと立ち上がる。

「そして……あなたも失敗作だったわ…」

「プレシア…あなたは…！」

混濁する意識を必死に押さえながら、リニスがプレシアを見上げる。

「でも、失敗作なりに成果を上げた…私のために最高の道具を作ってくれたわ」

「プレシア！」

「私はもうすぐ死ぬわ…。FATE プロジェクトの合間に扱った薬品が、私の呼吸器を冒してる。だから、その前に取り戻すのよ。私の過去とこの子の未来を。あの忌まわしい子が、私を殺してしまう前に！」

プレシアの過去を共有したリニスからすれば、プレシアがフェイトに対して憎しみにも似た感情を持っていることは理解できた。

そして、そこにはフェイト本人の責任などなにもないことも。

望まれて生まれ、ただ、思っていたのと違う育ち方をしたというだけだった。

プレシアがプロジェクト F.A.T.E の最中に病に冒されたことも、フェイトがプレシアにとって忌まわしい金色の魔法光を持って生まれたことも。アリシアとよく似ていることも似ていないことも、なにひとつフェイトのせいではない。

プレシアは、そこまで判った上でフェイトを憎んでいた。
強く激しく、憎もうとしていた。
道具として利用することで、自分にとっての価値を壊そうとしていた。
「あの子になんか奪わせない……！　私の娘はアリシアだけよ…私の今と未来は、すべてアリシアのものなのよ！　ずっと優しくできなかったんだから…今度はもう間違わない！」
笑みすらうかべて凄むプレシアを見て、リニスは自分の頬を涙が滑り落ちてゆくのを感じた。
「あんな失敗作に与える愛なんて、一匙分さえないわ……！　私はアリシアのためだけに生きて、アリシアのためだけに死ぬのよ！」
壊れかけた感情ではあった。
強すぎる自責の念が、すべてを見失わせていた。
だが、それはひどく一途な思いだった。

×　×　×

プレシアは、その場でリニスとの契約を終えることをしなかった。
リニスが秘密の保持を条件に、フェイト完成までの生存を望んだからである。
プレシアを止めることは、リニスには出来そうになかった。

フェイト一人の幸せを望むなら、どんな事をしてもフェイトをプレシアの元から引き離す方が良い。
だが、そうなった時にプレシアはどうなってしまうのか。
運命に裏切られ、使い魔に裏切られ、二人目の娘をも奪われる。
主と、自らが育てた少女。二人の間でリニスは揺れ、答えを出すことが出来なかった。

魂が抜けてしまったような感触だけがあった。
精神リンクはいつの間にか解除され、リニスはゆっくりと自分を取り戻していった。
その後、表面上はプレシアに対してもフェイトに対しても、リニスが態度を変えることはなかった。静かにフェイトを愛し育て、病身のプレシアをいたわった。
時間が必要だったが、リニスには時間がなかった。
プレシアの病気がプレシアの命を奪うには、少なくともあと一年以上の時間があるはずだった。
だが、リニスの残り時間は本当にわずかだった。
冬が来るより先に、フェイトに出していた2つの課題がクリアされてしまったのである。
フェイトとバルディッシュの相性は、やはり最高のものだった。
持ち主と主が互いに絆を深めあい、互いの能力を高め合ってゆくことで、今やフェイト

はどこへ出しても通用する一流の魔導師に成長していた。
最後の魔法習得のためますます精進するフェイトを見守りながら、リニスは思っていた。
いつか、フェイトも自分の運命と母の思いを知る日が来る。
そうなった時にこの子はどうなるのか。

壊れてしまうかも知れない。
プレシアがどう思っているかはともかく、フェイトは紛れもなくプレシアの娘である。
一途なひたむきさも不器用さも、なにもかもがそっくりだった。

「リニス、空中展開の訓練終わったよ。次は？」
空を舞っていたフェイトが、金色の羽毛のようにふわりとリニスの前に降り立った。
「……少し、休憩です」
「はあい」
まだまだやり足りなそうな表情ながら、明るい表情で素直にフェイトが答えた。
その笑顔の明るさに、リニスは胸が張り裂けそうになった。
真実を伝える事はできない。自分が何かを教唆するわけにもいかない。
「親子」の問題である。使い魔である自分が二人の運命を変える権利はない。
どちらか片方を助ければ、もう片方はおそらくひどく悲しい末路を迎えるのだ。

そして両方を助けるには、あまりに時間がなさすぎた。
アルフには伝えてあった。自分がいなくなった後、フェイトを守り、道を見失った時にはアルフが導いてやるようにと。
そして、バルディッシュに託していた。
フェイトが道に迷った時、願いを貫くための力となること。
道が暗闇に閉ざされた時、ひとすじの閃光となってフェイトの手にあり、闇を切り裂く刃であること。
自分の時間がもっと長く続くのであれば、もっと様々に教えたいことがあった。

リニスは倒木を利用して作った小さなベンチに座り、僅かな休息を取る。
そして、それを見たフェイトはリニスの前に駆け寄って、ちょこんと隣に座る。
見つめるリニスに、フェイトは照れたような笑顔を返す。
涙をこぼしても良いような気がしたが、それはこらえた。

フェイトは自分を愛するべきではない。母親をこそ愛するべきだと思っていた。

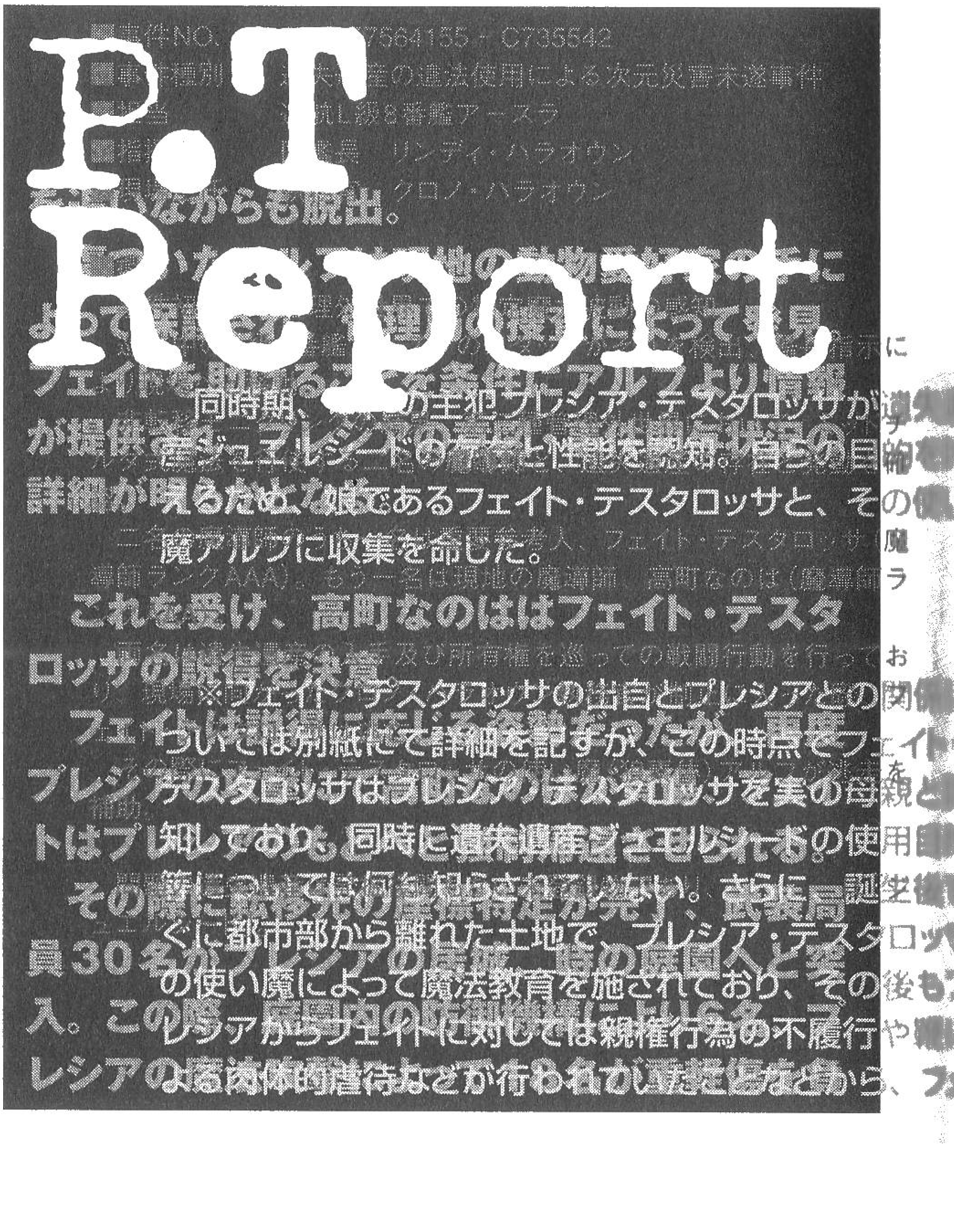
本当は愛せたはずの自分の娘を愛せない思い。
それが自分の心を…かつての飼い猫の体を媒介に、使い魔リニスという名でこの世界に

生み出したのだと思っていた。
自分が消えれば、その思いはもしやプレシアに戻り、たとえわずかばかりでも、親子の一時を過ごせるのではないかと。
ただの幻想かもしれない。だが、信じたかった。

リニスは黙って、フェイトの小さな肩を抱いた。
フェイトは少し驚いて、少し照れたが、黙って抱かれるがままでいた。
リニスは結局、我慢しきれずに少しだけ泣いた。
この愛しさと切なさが入り交じる幸福を、プレシアに返したかった。
これから、冬が来るはずだった。
凍てつく冬に凍えないように。冷たい風に傷つかないように。
リニスはただ、小さな肩を抱きしめることしかできなかった。

五章

レポート　P・T事件概要



Report　　1

■事件NO.　　AP0057564155 - C735542
■事件種別　　遺失遺産の違法使用による次元災害未遂事件
■担当　　巡航L級8番艦アースラ
■指揮官　　同艦長　リンディ・ハラオウン
■現場主任　　執務官　クロノ・ハラオウン

■概要

事件初動は、管理外世界での特定魔力波動の感知。

巡航中のL級8番艦アースラのスタッフがそれを検出、艦長指示により現場へと移動。

非転移モニタリングの結果、第三種管理外世界において、ミッドチルダ式魔法を行使する二名の魔導師と、遺失遺産の存在と発動を確認。

二名の魔導師のうち一名は重要参考人、フェイト・テスタロッサ（魔導師ランクAAA）。もう一名は現地の魔導師、高町なのは（魔導師ランクAAA）。

両名は遺失遺産の入手及び所有権を巡っての戦闘行動を行っており、現場に向かったクロノ・ハラオウン執務官が制止に入った際、フェイト・テスタロッサは逃亡。

その際にフェイト・テスタロッサの使い魔（狼素体）アルフが逃走を補助。

問題の遺失遺産は発掘後間もない未登録物であり、一般呼称は「ジュエルシード」。

移送中の事故で管理外世界へと四散、発掘担当者であるスクライア一族の少年、ユーノ・スクライアが、管理の甘さを悔いてそれを再収集すべく、管理外世界を探索。

収集時に負傷を追った際、現地の魔導師、高町なのはが急遽協力。

それ以降、高町なのははユーノ・スクライアに協力、遺失遺産を収集していた。

同時期、本件の主犯プレシア・テスタロッサが遺失遺産ジュエルシードの存在と性能を認知。自らの目的を叶えるため、娘であるフェイト・テスタロッサと、その使い魔アルフに収集を命じた。

※フェイト・テスタロッサの出自とプレシアとの関係については別紙にて詳細を記すが、この時点でフェイト・テスタロッサはプレシア・テスタロッサを実の母親と認知しており、同時に遺失遺産ジュエルシードの使用目的等については何も知らされていない。さらに、誕生後すぐに都市部から離れた土地で、プレシア・テスタロッサの使い魔によって魔法教育を施されており、その後もプレシアからフェイトに対しては親権行為の不履行や鞭による肉体的虐待などが行われていたことなどから、フェイト・テスタロッサが管理局法に基づく倫理基準において正常な状況把握を行うことが極めて困難な状態にあったことを、ここでも追記する。

この時点で申請した初動報告書（報告書NO.SSC866E8795）により、巡航8番艦アースラが事件の担当となる。

同時に、ユーノ・スクライア及び高町なのはが臨時局員として事件解決に協力。

フェイト・テスタロッサへの対応は高町なのはが行い、説得をもってフェイトに呼びかけることが続けられた。

その甲斐もあり、最後の収集となった海上戦ではジュエルシードの暴走状態を鑑みた両名が互いに協力。無事にすべてのジュエルシードを沈静化させることに成功した。

ただし、その際に次元空間に停泊していたプレシア・テスタロッサがアースラ及び戦闘空域の海上を威嚇攻撃。

収集失敗によってプレシアからフェイトに行われる虐待を避けようとしたアルフがジュエルシードを6個中3個強奪。

逃走するが、帰還後行われたフェイトへの、著しい肉体負傷を伴う虐待に対してアルフが抗議。アルフもプレシアによって攻撃され、重

傷を追いながらも脱出。
傷ついたアルフは現地の動物愛好家の手によって保護され、管理局の捜査によって発見。フェイトを助けることを条件にアルフより情報が提供され、プレシアの意図・事件関与状況の詳細が明らかとなる。

これを受け、高町なのははフェイト・テスタロッサの説得を決意。
フェイトは説得に応じる姿勢だったが、再度プレシアの攻撃にて高町なのはが負傷、フェイトはプレシアのもとへと強制帰還させられる。
その際に転移先の座標特定が完了、武装局員30名がプレシアの居城、時の庭園へと突入。この際、庭園内の防御機構により6名、プレシアの魔法攻撃によって18名が重軽傷を負った。

プレシアは開発者であった当時に、業務中の事故で一人娘であるアリシア・テスタロッサを喪失。
その件によって彼女は正気を失い、愛娘の蘇生を行うためと称してジュエルシードを求めていた（※1）
その際現場に居合わせたフェイトはそこで初めて自らの出自を知り、同時にプレシアより親子関係破棄の宣告が行われ、心神喪失状態となる。
（※2その際の音声および映像データは別途提出）

そしてプレシアはフェイトが持ち帰ったジュエルシード9個により儀式を開始、中規模次元震が発生。
現場最奥に踏み込んだクロノ執務官、次元震停止と説得にあたったリンディ提督らよりなされた投降の呼びかけをプレシアは無視。
庭園が次元震により崩壊する際、プレシア・テスタロッサは次元空間の穴、虚数空間へと落下。その際にフェイトが救出しようとするが、プレシアはそれを拒絶。
死亡確認は不可能な状況ながら生存・生還の可能性も限りなく0に近く、事実上の死亡として良いと思われる。なお、プレシアとともに

保存ポッドで保管されていたアリシアの遺体も同時に落下している。

フェイト・テスタロッサおよびアルフは重要参考人として保護、現在はアースラ監視下にあるが、両名とも庭園崩壊時の崩落で重傷を負っており、意識不明。回復を待って事情を聞くこととなっている。

高町なのは・ユーノ・スクライアに対する報償は現在検討中。

■最終被害結果
8番艦アースラ　プレシアによる魔力攻撃及び次元震震源地の強行突破　ダメージ軽微
重傷者5名、負傷者16名、軽傷7名
死者一名(プレシア・テスタロッサ)

ジュエルシード　21個中9個を喪失
保管分12個については、アースラ帰還後、
本局遺失物管理課へ受け渡しの予定。

■レポート担当　時空管理局執務官補佐
巡航L級8番艦アースラ通信主任　エイミィ・リミエッタ

※追記…プレシアが行おうとした儀式は、失われた世界「アルハザード」への旅。大規模次元震の最中に発生する断層内に、アルハザードへの道があるという発言がなされている。アルハザードは古代魔法の聖地であり、不可能領域魔法である死者蘇生や時間遡航といった秘術が現存すると言われているが、真偽の定かでないオカルト領域の伝承である。

×　×　×

「と、まあ、こんな感じなんだけど」
エイミィはキータイプを止め、背後のクロノを振り返る。
アースラのモニタールームには、報告書の文字が並んでいる。
「まあ…これなら問題ないかな。なのはとフェイトの件と、フェイトの現状以外は」
「戦闘を秘密にするのは良くない？」
「報告書には厳密な真実を書くようにと、士官学校で教わらなかったか？」
「現場は臨機応変、自分の学んだ経験と判断を信じろって教わったよ」
この手の言った物勝ちな舌戦で、クロノのエイミィに対する勝率はゼロに近い。
「戦闘の件については、まーいいんじゃない？　よーは子供同士のケンカなんだし」
「AAAクラス魔導師が本気で戦ったら、街一つくらいは消し飛びかねないわけだが」
「だ・か・ら厳重に結界張って、海上でやるんでしょ？」
エイミィは柔軟思考が制服を着ているような人物なので、今回の件にも一切動じていない。
クロノも動じているわけではないし、あらゆる命令や状況に対応できる策は用意している。
母であるリンディが、フェイトに肩入れする気持ちもある程度はわかる。
同時に、管理局の提督であるリンディが優秀な魔導師を眠らせておきたくないという思いも。

おそらく提督としてのリンディは、なのはとフェイトの両名を管理局に欲しいのだ。
優秀な魔導師はいつでも足りない。
そのせいで解決できるはずの事件が解決できなかったり、起こらなくて済む悲劇が起こったりもする。
武装局員、執務官、捜査官に教導官。あの二人であればどれを狙っても達成できるのは間違いない。強制や強引な勧誘をする気はないだろうが、その考えや狙いがあることは間違いなかった。
しかし、母として、人としてのリンディの、悲しい子供を放っておけないという気持ちもよくわかる。プレシアの気持ちも、少しは理解できるのだろう。
それらの思考は切り離して考えられるようなものではなく、すべてリンディ・ハラオウンという人物の思うことであり、それらの思いがまとまってリンディ・ハラオウンという人格を形成している。
そんな女性の息子に生まれてしまい、ある程度以上尊敬と愛情を持って共に暮らしながら同じ仕事についている以上、法や倫理に大きく抵触しない範囲での無茶に関して、黙認あるいは協力するのは、半ば以上義務だった。
なのはは、なんとなくだがリンディと気が合いそうだった。思いこんだら一直線で、無

茶をいとわず周囲を心配させるタイプである。

そしてフェイトは…と思って、クロノはフェイトの表情変化をほとんど見ていないことに気付いた。おそらくは真面目で冷静、そして決断力のある子である。戦闘スタイルを見ればそれはわかる。

そういう子が部下や同僚や家族にいたら、確かに良いなとぼんやりと思っていた。

なんのことはなく、クロノもやはりリンディの息子なのだった。

×　×　×

決戦を明日に控え、なのはもフェイトも、それぞれに時を過ごしていた。

なのははいつも通りに学校に行き、塾の帰りに自宅に寄ってユーノを拾い、一緒にアリサの家へと遊びに行く。

ユーノはフェレット形態でなのはかすずかの隣か膝の上に乗りつつ、三人が遊ぶのをよく眺めている。アリサはコミュニケーションが過激なので、やや苦手である。

そんなユーノから見て、仲良し三人組の個性はなかなかに面白かった。

「さー、ゲームやろ、ゲーム！」

アリサはいつも、三人を元気よく仕切っている。
なのはやすずかにとって、アリサの仕切りやちょっとした強引さはとても心強いもののようだった。
強引さは責任感と表裏一体である。そう言った意味でアリサはリーダーシップの塊のような少女で、面倒見の良さも人一倍だった。
アリサが取り出したゲームソフトをゲーム機に入れる間、すずかは本棚から攻略本を出して膝の上に広げ、説明書を自分の脇に置く。
つねに半歩ほど退いて友達を見守るスタンスのすずかは、そこにいるだけで場の空気を和らげる。
察しが良く気遣いが細かいため、突っ走りすぎるアリサを止めたり、考えすぎるなのはの気をうまく抜いてくれたりする。
気がまっすぐでちょっと理論派なところがあるなのはは、その二人と大変に相性がいい。
アリサとは意見をぶつけあいつつも互いに刺激しあうことができ、すずかとは互いに、思っていること、感じていることなど、深い話をすることができる。
だがそんな仲の良い三人も、初めは大ゲンカから始まった友情だと言う。
気が弱かったすずかをアリサがひどくいじめており（といっても、ヘアバンドを取り上

げたりといった子供らしいものだったそうだが）、その様子を見かねたなのはがアリサに対して実力行使に出たのだ（といっても、二度ほど警告したがアリサが聞かなかったので三度目は…ということだそうだが）。
　泣きながらつかみあいのケンカをするなのはとアリサの二人だったが、そのケンカを止めたのはすずかだった（といっても、一旦静止してもすぐには止まらず、戦いつづける二人を泣きながら何度も止めたのだそうだが）。

その後三人は教師に酷く怒られ、アリサとなのはに関しては親を呼んでの大騒ぎになるはずが、そうはならなかった。二人の父親はそれぞれに子供同士のケンカに親が出るのもなんだ、という意思が決まっていたらしく、それぞれに自分の娘のみを叱る方針だった。
アリサの父デビッドは娘のやんちゃを強く叱り、なのはの父士郎は、言葉が上手く届かなかった時の「力」の使い方について娘を強く戒めた。
反省を確認した上で「じゃあ、ケンカ両成敗ってことで」と、互いに言い争うこともなくあっさり事態は終了した。
その後、大学でサッカーをやっていたデビッドは、街のサッカーチームの監督を初めた士郎と趣味方面でも意気投合し、いまだに仲良しである。
そんな自分の父親を「なんだかなあ」と思う反面、尊敬しつつ大好きな父親であったあ

たり、なのはとアリサの意気投合は早かった。
そしてアリサとなのはは迷惑をかけたすずかをなにかと気遣ううち、すずかの優しさに心惹かれるようになった。
かくして出会いからひと月もしないうち、毎日一緒の仲良し三人組が出来あがったそうである。
それがどんな形であれ、気持ちをぶつけあうのは大事だよ、とは、なのはの姉、美由希の弁である。
なのはの根底にはその気持ちがある。だから、フェイトと戦うことを選んだのだ。
きっとあの日のアリサやすずか以上に不器用なフェイトに、手を差し伸べるのではなく、体中でぶつけあい、受け止め合うために。
仲良く笑い会う三人の親友同士を見上げながら、ユーノは明日の決戦のこと、対戦相手のフェイトのことをぼんやりと考えていた。

×　×　×

フェイトは、アルフの見送りを受けて屋上に立っていた。
部屋の掃除はもはや全て済んでいる。あとは小さなバッグを手に、鍵を返して終わりである。
フェイトの胸中は、いまだ迷いが消えていなかった。

いまだ捨てきれない、強い後悔が残る母への思い。
助けようとしてくれた白い防護服の少女への思い。
そして、どこにも行き場がないように感じる自分への思い。

自分で望んだ戦いに向き合うため、より強い意志を固めることが必要だった。
リンディに申請し、ミッドへの帰郷を許可してもらった。

「じゃあ…ちょっと行ってくるね」
心配をかけないよう、フェイトはアルフに笑顔を作る。
「ん…いってらっしゃい」
アルフも心配を隠し、フェイトを見送る。

決戦は、明日に迫っていた。

六章
決戦



水平線の彼方から、朝日が昇ろうとしていた。
いまだ明け切らぬ空の彼方に、二人の少女が浮かんでいる。
ひとりは、漆黒のマントを潮風に翻(ひるがえ)した黒衣の少女。
もうひとりは、純白の衣装と、桜色の光の翼を足もとに輝かせた少女。

先刻から、しばしの沈黙が流れている。フェイトの近接攻撃による踏み込み間合いから
はやや遠く、なのはの射撃距離にはいくらか近すぎる。
そんな間合いにあって、二人は静かに視線を交わしていた。

示し合わせたわけでもなく、不意に二人が同時に魔法陣を展開する。
小型の魔法陣。詠唱不要の高速起動魔法だった。

「ディバインッ！」
なのはの周囲に、桜色の光が次々と生じてゆく。
「ランサー、セット！」
フェイトの周囲に、電光を伴う光球が一斉に発生する。
《Divine shooter》
なのはの左手のレイジングハートが、真紅の水晶を輝かせる。

フェイトの右手のバルディッシュが、雷光色の水晶を瞬かせる。
それぞれの射撃魔法の発射体が、瞬く間に形成され、展開される。
なのはのディバインシューターが五つ。フェイトのフォトンランサーが四つ。
《Photon lancer》

それぞれの手に、それぞれの端末があった。共に戦い、心をつないだ魔法の杖。
不正進入による機能妨害を防ぐために他機との回線を完全遮断してはいるものの、幾度も戦いあった二機のデバイスには、それぞれに通じ合う思いがあった。
自律思考型端末が心を持つといっても、人間のような意識や言葉があるわけではない。
だが、主人の魔力を自らの機体に通し、より最適な形でそれを力と変える。
その力で主人を守り、襲い来る痛みを退け、その手に勝利と喜びを与えたい。
使命感とも言えるそんな強い思いだけは、はっきりと自らの内に感じることができた。

自分は、現在の主によって生み出されたわけではない。
だが誰よりも自分を上手に扱い、自らの性能をどこまでも引き出してくれる。
深く強く、自分を信じてくれている。
鋼の機体に眠る心にとって、それは無上の喜びだった。
その信頼に応えたいという願いが、意識の底で強く燃えている。



なのはが手にした、魔導師の杖レイジングハート。
フェイトが手にした、閃光の戦斧バルディッシュ。
二人の決戦は、この二機の戦いでもあった。
「シュートッ！」
「ファイアッ！」
それぞれの杖が振り下ろされ、射撃魔法が発動する。
高速飛翔するフェイトのフォトンランサーと、不規則に揺れながら弧を描いて飛ぶなのはのディバインシューター。並の魔導師相手であればたやすく防御を打ち抜き、一撃必倒の威力を持つはずのそれらが惜しみなく撃ち放たれ、相手を目指して飛翔する。
なのはは大きな回避運動で、ランサーをかわしてゆく。
直線飛翔のみのランサーは、大きくよけてもさほど問題がない。
もとより戦闘巧者のフェイトが、見合った状態からこんなよけやすい射撃を放つことに牽制以上の意味はない。
なのはの防御は強力だが、受けることでも魔力は消費する。鋭く圧縮されたフェイトの攻撃であればそれはなおさらである。激戦を見越して魔力温存のために選択した、本来は苦手な回避行動だった。
そして回避をしながら、なのははすでに次の行動へと入っていた。

フェイトは襲い来るなのはのシューターの初弾を、紙一重の機動で回避する。
鋭い誘導をするなのはのシューターは、大きくかわすことができない。
回避をするならば、寸前でかわさなければならない。
そして、それが同時に五発も飛んでくる。
フェイトほどの高速機動と回避能力があれば、自動誘導弾の捌き方はいくらでもある。
だが、なのはは任意の弾体を思念制御によってコントロールできる。いまだ五つすべてのコントロールをすることは無理だが、二つ三つであれば同時に制御ができる。
常に自分の死角を狙って飛来するシューターを飛ばさせたままでは自由な機動が阻害され、制空権を取ることができない。
「バルディッシュ！」
《Yes sir》
主の声に、戦斧が答えた。
バルディッシュの刃が角度を変え、そこから金色の魔力光が溢れて光の刃を形成する。
漆黒の機体の尖端に垂直に立った光の刃。死神の鎌を彷彿とさせるその形態は、バルディッシュの近接攻撃専用形態だった。
ぐん、と空中で加速をつけてフェイトはなのはに向かう。
迎撃のために襲いかかるシューターの弾体を、フェイトは戦鎌(いくさがま)の光刃(こうじん)で次々と切り裂いてゆく。ひとつ、ふたつ、みっつ。

不規則に揺れるシューターの光弾をあっさりと切り捨ててゆくその技量は、フェイトが積み重ねた鍛錬の密度がなさしめるものだった。

だが、四つ目のシューターは切り裂こうとした光刃をするりとかわし、フェイトを襲った。

「…………ッ！」

視界の端に、なのはが思念制御をしている様子が見えた。

危険。だが、好機でもあった。

フェイトはシューターを防御することをせず、空中で加速をつけてなのはに突撃した。

「！」

金の光を残して爆発的な加速をしたフェイトの斬撃がなのはを襲う。

回避ができるような速度ではなかった。まずは、フェイトが一撃。

戦況を見守る一同の誰もがそう思った瞬間、なのはの背中から一発のシューターが姿を現した。

無防備な自分を囮に、シューターを隠して迎撃する、そんな勇気と無謀の狭間にある戦法だった。

だが、フェイトは動じない。

「アーク・セイバーッ！」

ぐん、と大きく振るった戦鎌から、光刃だけが射出された。

ブーメランのように回転する光刃は正面から飛来するシューターを両断し、なのはにまっすぐ向かってゆく。

なのはがとっさに右手を挙げ、防御の魔法陣を発生させる。
その瞬間、フェイトの背後から迫ってきていたシューターの思念制御が外れ、目標を見失ったシューターは見当違いな方向へと飛んでいった。
圧縮魔力刃（あっしゅくまりょくじん）・アークセイバーを正面から防御することになり、なのはの魔力が削られる。
高等技術である思念制御は、なのはにとってはつい最近練習しはじめたばかりの運用法である。なのはの練度では、いまだ他の魔法を発動しながらの制御続行や、自動誘導への瞬間切り替えがスムーズにはできない。
フェイトは経験と勘で、それを読み切った形になる。
《Saber blast》
「！」
バルディッシュのコマンドで、セイバーが爆散する。
金色の爆煙の中、目を閉じたなのはは動くことなく、高速で魔法陣を展開する。
その頭上からフェイトは突撃する。杖と魔導師が息をあわせた連携である。
防御を抜いてのクリーンヒットを一撃入れれば、肉体的に頑健でないなのはは簡単に落ちる。傷や後遺症が残らないような攻撃で、なるべく優しく落とすつもりだった。
《Protection》
レイジングハートが防御の魔法を発動した。
死角からの攻撃を受ける可能性に備えての全方位防御は魔導師として正しい選択だった。

だがそれ故に、リニスによって徹底した戦闘教育を施されたフェイトはそれを読み切っている。一撃入れて防御の隙を見つけ、直後にそこを叩く。

だが、バルディッシュを振りかぶって突進したフェイトの視界に、奇妙なものが映った。
なのはの杖・レイジングハートの先端形状が変化していた。
フェイトの記憶では、それは中長距離砲撃のためのモードであるはずだった。
何故、今？　とフェイトは思い、直後に気が付いた。
杖との連携をできるのは自分だけではないのだ。
防御を杖に委ね、自らは索敵と攻撃準備をしていたとしたら。
「バルディッシュ、防御…ッ！」
《Defenser》
フェイトは咄嗟に攻撃を止め、発動時間最速の防御魔法を発動させる。

きっ、となのはが目を開き、頭上のフェイトを見据えた。
そして、射撃・砲撃特化の形状に変型したレイジングハートを迷わずフェイトに向けた。
すでに環状魔法陣が展開され、先端にはまばゆく輝く光球がチャージされている。
「ディバイン……」
光球が一気に膨れあがり、フェイトは戦慄する。

「バスターーーッ!!」
どう、と光が奔流となり、フェイトにまっすぐ向かってゆく。
なのはの主砲にして一撃必倒の魔法、直射砲撃ディバインバスターだった。
莫大な魔力を直接相手に叩きつけるというシンプルな攻撃の分、命中時の威力は絶大である。
フェイトの防御魔法、ディフェンサーに命中したバスターは、空中でしっかりと踏ん張ったはずのフェイトを一気に数メートルも後退させた。
「ああああ……ッ!」
防御の上からでも、凄まじい勢いで魔力が削られてゆくのがフェイトにはわかった。
バリア貫通の作用が卑怯なまでに強い。「削る」どころではない。「抉る」である。
フェイトはディフェンサーの出力を全開にして、かろうじてバスターの軌道を反らした。
桜色の光は天に向かって走り、雲を抜いて消えていった。

追撃は、なかった。
なのははフェイトを狙った姿勢のまま静かにフェイトを見上げており、レイジングハートはヘッド部の排気ダクトを解放し、バシュウと音を立てて圧縮魔力の残滓を排気した。
フェイトを見上げるのは、無言のままのなのはの静かな瞳だった。
防御のためにバルディッシュを支えたフェイトの両手はいまだ痺れ、大きく魔力を削られた時特有の、手足の末端が冷たくなるような感触だけが残っていた。

全力の勝負と言いながら「全力のつもり」で力をセーブするような戦い方をしたことを目の前の少女が責めているようにも思え、謝罪をしようかと思った。
だが、それはかえって失礼なことであるとすぐに思い直した。
必要なのは、謝罪ではない。
全力以上の全力をもって、この少女を落とすことである。

×　×　×

結界の外からではあったが、アルフとユーノも互いに少しの距離を置いて、二人の戦いを見守っていた。
無言だった二人の沈黙を破ったのは、ユーノだった。
「……心配？」
突然の問いかけに、アルフはぶっきらぼうに答えた。
「あたりまえじゃんか…めちゃくちゃ心配だよ」
「……僕もだ」
再び、二人の間に沈黙が降りた。
この戦いに向かうことを止められなかったという思いがあり、同時に「止めるべきではない」という判断を二人はそれぞれにしている。

結果はどうあれ、ただ無事に戻って欲しいというのが二人の共通の思いだった。
「まあ…フェイトが勝つのは当然として、あんたんとこのあの子の破壊力は物騒だからね」
なにげなくアルフがつぶやいた言葉に、ユーノもなにげなくつぶやきかえす。
「まあ、フェイトは確かに強いけど、今回勝つのはなのはだから」

二人は顔を見合わせて、無言のまま見合う。
「フェイトが勝つ」
「なのはだよ」
気付けば見つめ合いがにらみ合いに発展していたが、先に視線を外したのはアルフだった。
「……やめた。勝敗なんかは…まあ、どうでもいいんだ」
ユーノは少し拍子抜けしたが、アルフの言葉には納得した。
「まあね…無事に戦いを終えて二人が戻ってきてくれて…フェイトが何か気持ちを吹っ切れれば、それでいいとは思うんだけど」
アルフは、少し驚いたようにユーノを見つめた。
なのはとフェイトがジュエルシードのために戦いあっていた時は、アルフにとってなのはやユーノは正直邪魔な存在であり、ユーノもまた、自分やフェイトをそう思っていると思っていた。
「あんたもフェイトのこと…心配してくれてるのかい…?」

「僕はまだ、フェイトのことをよく知らないけどね」
少しの微笑みが、アルフには意外だった。
「なのははフェイトの事、ほんとに好きみたいだから…だから友達になりたくて一生懸命なんだし」

アルフには、上手く想像することができなかった。
フェイトがアルフやリニス以外の誰かに微笑みかけている風景も。
普通の女の子のように友達を持ち、その友達と笑い会っている風景も。
ましてその相手が、幾度も戦った宿敵とも言えるあの少女であるというならなおさらである。
だが、もしもそれが叶うなら、アルフにとってこれ以上嬉しいことはなかなかない。
それは、目の前の少年も同じなのかもしれない。
「あんた…名前、なんてったっけ」
「ユーノ・スクライア。ユーノが名前ね」
「……ユーノ…」
「うん、アルフ」
「あんたも、あたしと同じなのかな…。あたしらにとっては、きっとご主人様の幸せが、自分の一番の幸せなんだ…」
しんみりとしたアルフの口調に、ユーノの笑顔がややぎこちなくなる。

「ああ、ええと…。ご主人様というか、僕はなのはの友達だから…」
「………？　ユーノはなのはの使い魔じゃないの？　ネズミ素体の」
「ち…違うっ！　僕は人間だし、動物形態もネズミじゃなくてフェレットッ！」
「あらま」

そんな二人の様子をサブモニターで眺めつつ、エイミィはなのはとフェイト戦闘を映像記録に収めるのに余念がない。
「また、ずいぶん厳重に録画してるな」
「合計6カメ使ってるからね。あとで編集するの。二人の思い出は、ちゃんと残さないとね」
本気か冗談かを掴みづらいエイミィの返答を聞き流しつつ、クロノは画面を眺める。

先ほどのなのはの砲撃後に一時停止していた戦闘は、再び激戦の様相を呈していた。
フェイトの高速機動がトップスピードに乗りはじめ、なのはは誘導射撃でよく追撃しているが、あと一歩追い切れていない。
フェイトも細かく的確に攻撃を入れているが、固いなのはの防御や素早く重い反撃に、あと一歩攻めきれずにいるようだ。
「フェイトちゃん有利ってクロノくんの予想は、ちょい外れだね。かなり互角の戦いだよ」
実際、二人の戦闘は新人武装隊員の学習教材にしても良いくらい基本戦術に忠実で、綺

麗な戦闘だった。現状は自分の距離とペースの奪い合いであり、細かい攻撃を重ねて一撃を入れるチャンスを探っている状態である。

フェイトも万全に近い状態で動いているが、なのはの空間把握能力がここまで高いというのはクロノにとっては少々意外だった。

相変わらずなのはの誘導弾や砲撃が奇妙な消え方をしていることがわずかに気にはかかったが、それは勝負の行方自体とはさほど関係ないように思えた。

上空での高速機動で旋回したなのはとフェイトが、白く長く雲を引いた。

二人の飛翔時最高速度に大差はなかったが、空中機動性には雲泥の差があった。

なのはがいくら空間を上手く使って逃げてもフェイトはたやすく追いつき、確実に攻撃をヒットさせてゆく。

フェイトの得意距離は射撃を撃つことができ、なおかつ一度のダッシュで近接戦闘を当てられる距離である。剃刀のごとき鋭い攻撃は、たとえバリアに防がれたとしても確実に相手の魔力を削ってゆく。

一方、射程と誘導操作に優れるなのはは、それ以上の距離で戦いたい。

中距離から近づいてくる相手を狙撃するような戦法はなのはの得意とするところなのだが、フェイトの素早い機動と回避運動がそれを許さず、遠間に離れきることもさせずにいる。

徐々に追いつめられてゆく焦りを感じながらも、なのはは常に魔力リソースの一部を砲撃に残している。フェイトが一瞬でも動きを止めれば一撃を見舞う。

防御されても構わないのである。削る量には自信があり、そこからの戦略もなのはにはあった。

追いつめているはずのフェイトも、同様に焦っていた。フォトンランサーや打撃が的確にヒットはしているのだが、バリアやシールドを抜ききれず、大きなダメージにならない。かといってバリアを抜ける大きな攻撃を撃とうと足を止めれば、向こうの重い砲撃が飛んでくる。

なのはは高速機動戦ではいまだ誘導弾を上手く制御しきれないようであり、そこがフェイトの勝機だった。だが、どんな隠し球を持っているかわからない相手である。自分のペースを維持したままでの素早い決着が望ましかった。

追いすがるフェイトを振り切るための蛇行飛翔をしつつ、なのははレイジングハートに精神通話で問いかける。

『このままだとまずいね…なんか、動きが読まれはじめてるし』

《Yes master》

攻撃・防御・高速機動を繰り返し、魔力量はすでに開始時の6割を切ろうとしている。

それはフェイトも同様であって欲しいとは思うが、魔力残量が少なくなった時に取れる選択肢は近接戦闘ができるフェイトの方が圧倒的に多い。

消耗戦で不利になるのは、基本的には一発の消費量が多いなのはの方でである。

『切り札は最後までとっとくけど…その前にちょっと、ひと勝負してみようか。付き合ってくれる？　レイジングハート』

《All right my master》

主の問いに、レイジングハートはどこか嬉しげに即答した。

背後から放たれたフェイトのランサーを、なのはは振り向いて小さな魔法陣の盾で弾いた。

「………？」

フェイトの疑問の視線を受けながらもなのはは飛翔を止め、足もとに大型魔法陣を展開した。笑みさえ浮かべて、自信満々の様子である。フェイトも静止し、様子を見る。

レイジングハートが魔法発動を上手く隠し、内部でどんな魔法を発動しているのかはわからない。

罠かもしれない。フェイトはそう思い、バルディッシュもそう判断した。

しかしそれは、同時に好機でもあった。フェイトも同時に大型魔法陣を展開する。

足の遅い相手なら、この魔法から逃れる術はない。

天にかかげたバルディッシュが戦斧から槍の形態へと変化し、その先端に金の翼が生じる。

「いくよ、バルディッシュ！」

《Yes sir》

主の呼びかけに、閃光の槍が静かに答える。
晴天だった空がにわかに曇り、ゴロゴロと雷が鳴り始める。
フェイトの足元の魔法陣が放電をはじめ、フェイトの全身とバルディッシュも電光をまとう。

『あ……あれ……っ？』

この時点で、なのはの当ては外れている。
なのはには射撃と砲撃しかないと踏んでいるであろうフェイトは、足を止めた自分に近接を仕掛けてくるか砲撃勝負に来るか、と読んでいたのである。
実際に射撃と砲撃しかないなのはであるから、近づいてこようと撃ち合いになろうと、砲撃を放つつもりではいた。だが、徹底的に魔力を注ぎこんだ、大威力の反応炸裂型砲撃である。近接攻撃に対して使えば自爆めいたことになりかねない無茶な戦法であり、遠間であれば相手の砲撃を破壊しながら撃ち抜く。
いずれにせよ、なのはが戦闘の素人だとすでに読んでいるフェイトの裏をかく、自分が素人であることを逆手に取った戦法のはずだった。
『えっと！　どうしようレイジングハート？』
表情に出さないよう慌てる主の心中を察しながら、レイジングハートは思考する。
双方すでに魔法は発動している。こちらの回避率は絶望的な数字だが、防御しても削られるのである。それならば動かないあちらに、一発分の大ダメージを与えるチャンスと見

ることもできる。そういった検討の後に、レイジングハートは冷静に提言した。
《Let's shoot it》
『だよね！』
どうやら同じ事を考えていたらしく、即答して自分を構え直す主に再度信頼と愛情を深めつつ、レイジングハートは魔法起動の準備をする。
ディバインバスター・フルバースト。
なのはの所有魔法のうち、現在二番目の威力を誇る大威力攻撃である。

フェイトの広域雷撃魔法の制御を補助しながら、バルディッシュは思考する。
あちらはどうやら、撃ち合いを選ぶようである。
だが、発動自体はこちらの方が早い。主の機動力を持ってすれば回避運動はギリギリで間に合うはずである。
「大丈夫だよ、バルディッシュ。食らわないようにちゃんとかわすから」
バルディッシュの心中を察したように、フェイトがつぶやく。
「あの子は強いし勇気もある…油断なんかしない」
激しい放電の中で目も閉じずにフェイトはバルディッシュの柄を強く握る。
「だから、いまのうちにこれで削っておく…余分な魔力なんか残させない！」
力強い発言だった。

ずいぶんと久し振りに覇気を感じさせる主の声と魔力に、バルディッシュは静かな充実感を感じ、発動シークエンスを加速させた。
《Get set》
通常より2秒ほど早く、術式展開が終了する。
「ありがとう、バルディッシュ……！」
フェイトは微笑み、愛機を大きく振りかぶる。
広域雷撃魔法、サンダーレイジ。
リニスより卒業課題として出され、いままで幾度もフェイトの危機を救ってきた雷の高位魔法である。
「ディバイ――――ンッ！」
なのはがレイジングハートの先に光球を発生させる。
フェイトがバルディッシュを一振りすると、なのはの頭上で雷鳴が轟いた。
「サンダーーッ！」
「レイジッ！」
フェイトが数瞬早かった。落雷がなのはに向かって幾筋も落ちる。
《Lightning Protection》
レイジングハートがなのはの頭上に対電バリアを発動させ、そこに落雷が直撃する。
防ぎきれなかった電撃の余波はバリアの内部に進入し、なのはの防護服を焦がしてゆく。

「あつ、痛…熱…ッ!! でも………バスターッ！」
電撃を受けつつも、なのははバスターを放射する。
「！」
回避行動に入っていたフェイトは驚愕した。
砲の拡散度合いが、並ではなかった。それはもはや砲ではなく、迫り来る壁だった。
魔法陣の盾を発生させ、両手で防いだが、ほぼ直撃だった。
《Round shield》
「く……ああ……ッ！」
拡散している分威力は低いはずのその砲は、それでも十分すぎる重さを持ってフェイトを襲い、フェイトの魔力を削ってゆく。
二人が放った魔力と衝撃がそれぞれに衝突し、空中で激しい反応爆発を起こす。
海面に叩きつけられた衝撃によって天高く水柱が上がり、付近に海水が雨のように吹き上がる。
「うわ…コ…コレは…まずいか？」
「フェイト…フェイトーッ！」
遠間から見ていたユーノとアルフは、その魔力量に慌てる。
「ふ…二人して、なんて馬鹿げた威力を…」
クロノが唖然とし、さすがのエイミィも慌てて空域データを取る。

「うわ…さすがにヤバいかな…？　なのはちゃん、フェイトちゃん？　聞こえたら返事して！」

なのははかろうじて意識を保っていたが、自分が上を向いているのか下を向いているのかもわからなかった。

ふわふわと浮くような感覚の中、ただぼんやりと、現在の状況を考えていた。

なのはは本来、少し色々なことを考えすぎてしまう子である。

今回の件についても、実は一人で相当に悩んでいる。

フェイトと友達になりたいと思う気持ちはあったが、別の世界で生きた子であり、自分が無神経に接触しようとしたり、何も知らないのに不用意な言葉をかけたりすることで、かえって傷つけてしまうかもしれない。

フェイトの不幸な境遇は知ったが、知っただけである。

自分がフェイトに対してしてやれることなどないのかもしれない。

自分は単に、フェイトに一方的に、無神経にわがままな気持ちをぶつけているだけなのかもしれない。

なにもしないのが、一番いいのかもしれない。

その方が、嫌われるより、迷惑をかけるよりずっといいのかもしれない。
本来のなのははそうやって悩み、考えこみ、動けなくなる子だった。
誰かに迷惑をかけるのが何より嫌いで、かりそめの笑顔で、「良い子」でいることが自分にできる唯一のことのような気がしていた。
だが、苦難と忙しさに包まれていた家族が本来の姿を取り戻し、友達と出会ううち、なのはも少しずつ変わっていった。

フェイトと初めて出会った時から感じていた。
ほとんど視線を合わせない癖や戸惑ったようにつぶやく静かな声は、なのはにとっては
そしていまの親友たちも、かつてはそれぞれの孤独を感じ、それぞれに少しずつ間違っていた。
そのまま自分の昔の姿だった。
だが、初めはぶつかり合い、悲しい思いや痛い思いをしても。
それでも触れあい、同じ時間を共有し、気持ちを分け合ってゆくうち。
ゆっくりとではあったが、本来の姿を取り戻すことができた。
いらだちながら他人を傷つけてばかりだった少女は、まっすぐなリーダーシップを発揮する少女になった。
内気で言葉を上手く発せない、気持ちを表せなかった少女は、優しく人の心の痛みを抱

きしめることのできる少女になった。
誰かに頼ったり、迷惑に思われることが苦手で、いつも自分を追いつめて孤独になっていた少女も、親友たちとの触れあいで、きっと変わっていっている。

だから、選んだ。勇気を出して、手を伸ばすことを。
そして伝えた。自分の気持ちを。
「助けてあげたい」などといった上から見た気持ちではない。
ただ、見たかっただけである。きっと優しい、あの子の笑顔を。
そして、自分と一緒に笑って欲しい。
友達になれたら、二人で笑いあうことができたら。
「…………そうだ……」
まだ、聞いていない。
答えを聞いていない。自分が伸ばした手を、取ってくれるかどうかを。

「寝てる場合じゃ、ないッ！」
なのはははっきりと目を覚ました。
ひんやりと冷たい水蒸気に包まれたそこは、雲の中だった。
《Good morning master》

「うん！　おはよう、レイジングハートッ」
気絶していたのはほんの数秒程度だったようだ。最後の意識で、爆発から逃れるために自分で上空へとダッシュしたことも思い出した。
入っていたエイミィとユーノからの通信に答え、無事を伝える。

「…………あ……」
視界の遙か先に、小さくフェイトが見えた。
『……大丈夫？』
フェイトから直通で精神通話が届いた。
『まあ…なんとか……フェイトちゃんは？』
『こっちも、なんとか』
通信しながら、なのはは落ち着いて、状況と全身を確認する。
なのはの防護服は、大きな破損こそなかったが全身焦げと小さな傷だらけだった。
高位魔法の直撃である。この程度で済んだことを感謝しなければならない。
レイジングハートは、多少汚れたり、表面に小さな傷はあったが破損はない。
『わたしのレイジングハートはなんとか無事なんだけど…フェイトちゃんのバルディッシュは？』
『……大丈夫』

次の質問をする前に、なのはは自分の魔力を確認する。残り二割を切りかけていた。
ギリギリ、最後の切り札を起動することはできそうだったが、もう大型魔法の防御はできない。
大きく削られたら、それだけで魔力が尽きてしまう可能性もある。
『フェイトちゃんは、まだやれそう？』
『君が、無理でなければ』
『わたしは全然平気だよ。まだまだ余裕かな！』
単なる強がりだったが、一応の戦略でもある。
『じゃあ、わたしもまだまだ余裕だ』
なのはは少し、自分の耳を疑った。
フェイトの声にほんの少し、微笑みの色を感じたからである。
なのはの『じゃあ、少し下に降りようか』の言葉を受けて、フェイトも海上付近に降りることにした。
なのはには強がってみせたが、フェイトの魔力量も残りわずかだった。
すべて自己供給のディバインバスターF B（フルバースト）と比較して、自然の力を借りる分、空のある野外で撃つサンダーレイジの魔力消費は少ないが、それでも高位魔法である。
バスターの直撃で抉られた魔力量も尋常ではない。

攻撃の魔力が尽きても、飛翔することさえできればフェイトは戦えるが、次に大きな魔法を受けたら防御しても間違いなく落ちる。
ここから先はさらに無謀な戦いになるが、対戦相手の元気な強がりを聞いて、フェイトは自分の胸に、静かな情熱が生まれていることに気づいた。

負けたくないのである。
はじめ、自分は中途半端だったことを終わらせたいだけだった。
そして、戦いをおそらくは自分の勝利で終わらせて、白い防護服の少女がかけてくれた優しい言葉に、謝罪をしようと思っていた。
『友達にはなれない』と。
自分がなにをしてあげられるかもわからない。それに、たとえば誰かと笑い合うような、そんな資格が自分にはないように思えていた。
だが、今は少し違っていた。
友達だとか、そういったことはわからないが、この戦いがとても興味深いのである。
かつてリニスやアルフとしていた模擬戦に感覚は近い。だがそれ以上に相手の能力や実力に新鮮な驚きがある。強力な相手だからこそ、自分の攻撃命中や回避成功に深い充実感がある。本気で向かってきてくれる相手に、より強い自分を見せたいとも思う。

《Get set》
主の思いに同意するかのように、バルディッシュが槍から戦斧の形態へと戻る。
やることは決まっていた。撃てるだけの、あの子を落とせるだけの魔力は残っている。
この戦いは誰に強制されたものではなく、誰に止められることもない。
そこには親に捨てられた子供もいなければ、愛されることのなかった人形も、偽りの記憶にすがり、それが消えたらすべてを見失ってしまった哀れな道具もいなかった。
ただ自分で選んだ戦いを戦う魔導師がいて、眼前にはその好敵手がいるだけだった。

そして二人は雲間を抜け、再び海上付近へと降りてきた。つい先ほどまで戦っていた空域である。魔法戦が行われた場所特有の、魔力密度が特に濃い空間だった。

なのはと同様に、フェイトの防護服もボロボロだった。
手袋は裂け、ボディスーツはところどころに穴が開き、マントの裾も破れだらけである。
間合いは、射撃戦の距離だった。
すっ、と、フェイトがバルディッシュをなのはに向けた。
「さっきは余裕って言ったけど…私は多分、大きい魔法は次で最後になる」
「その…実は、わたしも」

照れ笑いをしつつ、なのはが告白する。

「だから、確実に当てに行く…油断しないで」

「ん…油断、なし。わたしも確実に当てるよ」

あくまで静かに真剣なフェイトに、なのはも真剣な表情を返す。

遠くから二人の会話を聞き、姿を見ているユーノとアルフは、自分のパートナーが何を狙っているのかを察した。発動すれば、間違いなく最後の一撃となるはずである。

アースラモニタールームのクロノとエイミィ、ブリッジのリンディも、静かに状況を見守る。

ほぼ同時に、二人が魔法陣を展開した。

なのはは集中し、フェイトは詠唱に入った。

二人の周囲に魔力が渦巻く。どちらも大型魔法だった。

なのははレイジングハートの機能によって登録済みの魔法に関しては詠唱の必要がないが、チャージまでの時間があるため、発動までの時間が魔法の規模に左右されることに変わりはない。だがこの魔法勝負に関しては、発動の速さでは決して負けない自負と理由が、なのはにはあった。

だが、どうも様子がおかしい。

大型攻撃魔法にしては、フェイトの詠唱の進行が早すぎるのである。

「あ……まさか…ッ！」

なのはは自己の魔法のチャージを終えた瞬間、フェイトに向かって鋭くダッシュをかけた。フェイトの狙いに気付いたからである。
この詠唱は、止めなくてはならない。
だが、フェイトの詠唱完了が早かった。
「!!」
がん、と、なのはは壁にぶつかったような衝撃で急停止した。
ぶつかったのは、空中に浮かんだ魔法陣だった。
気づけばなのはを取り囲むように、無数の魔法陣がなのはの周囲を覆っている。
「あつっ！」
その直後、なのはの左腕がバチンと空中に固定された。続いて右腕、右足、左足。
空中に磔の姿勢で固定されたなのはは、必死で抵抗しながらもフェイトに問う。
「せ…設置型のバインド…ッ？」
こくんと小さくフェイトがうなずく。
「危なかった…もう少し早く動き出されてたら、設定範囲外だった」
「あああ～～～ッ！　なんだかズルいっ！」
なのはが悔しさにもがくが、すでに全身は完全に固定されていた。
「ズルくない…確実に当てに行くから、油断しないでって言ったはずだよ」
拘束されたなのはの手足の周囲にパチパチと小さな電気が走る。遠隔発生の設置型、発

動まではほぼ不可視。そして周辺に発生する電気系魔法の威力を向上させる効果がある贅沢な拘束魔法である。

「君も、チャージしてたのは攻撃じゃなかったみたいだけど…こっちが先だ！」

と、フェイトが今度こそ攻撃魔法の詠唱に入る。

自分のチャージ魔法を見抜かれていたことに驚きつつも、なのはは必死にバインドへの抵抗を試みる。

フェイトの周囲に、フォトンランサーの光球がひとつ、ふたつ、みっつと次々に発生してゆき、その数はまたたく間に二十を越え、三十を越えた。

「…………ッ……！」

合計三十八個。そのすべてが、連射型の大型光球だった。

「フォトンランサーのバリエーション…私とバルディッシュの必殺魔法」

「な…なにそれ！　なにそれッ!?」

「必殺っ!?」

一瞬バインドへの抵抗も忘れて慌てるなのはに、フェイトは静かにつぶやいた。

「弾殻は全部、非殺傷性にセットした。当たっても魔力ダメージだけだから、安心して」

「無理！　安心するのは無理ッ！」

なのはは平時から、自己の攻撃をほぼすべて純粋魔力攻撃…つまり物理破壊を伴わな

い、非殺傷性の攻撃に設定している。物理ダメージ型に変更するのは、無機物や壁を破壊する必要があるときのみである。

だが純粋魔力攻撃とはいえ、肉体に傷がつかないだけで、撃たれて痛いことに変わりはない。三十八個もの砲台からの一斉射撃ともなれば、防御したとしてもその衝撃と痛みは半端なものではない。

「じゃあ……降参、する？」

フェイトが静かに聞く。

「それも無理！　ぜったいしない！」

なのはは気合いをこめて言葉を返し、きっとフェイトを見つめ返す。

「じゃあ、そのまま受けて。わたしの全力！」

フェイトが左手を高く掲げると、バルディッシュがトリガーセイフティの解除となる魔法名読み上げを行う。

《Photon lancer phalanx shift》

「一撃必倒、フォトンランサー・ファランクスシフト！」

三十八の光球が、すべて同時に放電と輝きをはじめる

「ファイアッ！」

フェイトの号令のもと、一斉にランサーが発射される。

秒間七発の高速連射により、単一の対象めがけて4秒間で一〇六四発の射撃を叩き込む。

命中すれば、耐えられる者などいない。

たとえ防御されたとしても、魔力を根こそぎ削り取る。

凄まじい反動を全身に受け、体内に残る魔力のすべてが勢いよくあふれ出してゆく感触の中、フェイトは斉射終了までの4秒間、懸命に照準制御をする。

防御魔法を発動するタイミングはなかった。いくらなのはの防護服やレイジングハートの自動防御機能が優秀とはいえ、それだけで耐えられるとは思えなかった。

轟音響く4秒が過ぎ、一〇六四発の雷の槍はすべてなのはに打ちこまれた。

光の爆発と、命中して砕け散った槍が成す濃密な魔力の霧の中に、なのはは完全に隠れてしまっていた。

フェイトは息を整えながら、数発残った発射体を自己の周囲に集める。

撃ち切れなかった分もひとつにまとめれば一発分の攻撃程度にはなる。

ファランクスシフトでの全力斉射により、フェイトはほぼすべての魔力を消費してしまっている。発射終了と同時に、バインドの保持も止めていた。

現在も飛翔や基礎行動に影響が出るほどではないが、もはやほんのわずかの無駄遣いもしたくなかった。

戦況を見守るユーノやアルフ、アースラクルー一同は、この時点で勝負の行方ではな

く、なのはの安否のみを気遣っていた。
純粋魔力ダメージを受けた対象のダメージ限界は、防護服の機能破壊と、魔力喪失による昏倒である。
高速で飛来する弾殻の衝突で打撲を受けたりもするだろうし、杖や防護服に設定されたセイフティ機能である自動浮遊機能まで削られていれば、海面への落下もありうる。
ゆっくりと、霧が晴れていった。
そして、一同はそこで信じられないものを目にした。
なのはは意識を保っていた。
純白の防護服はもはや汚れだらけでボロボロだったが、かろうじて元の形を保持している。
だがその場を見ていた誰もが信じられなかったのは、なのははすでに自らの足もとに魔法陣をセットし、魔法のチャージを終了しようとしていたことだった。
「…………!?」
一番驚いたのはフェイトだった。命中していたはずであり、防御のタイミングなどなかった。そして防御していたとしても、あんな魔法陣をセットし、魔法を行使するだけの魔力は残っていないはずなのである。
そして、キン、と澄んだ音を響かせて、フェイトの両手が空中に拘束された。

これを信じられなかったのも、フェイトである。

「え……？」

続いて両足も拘束される。油断していたのは確かだったが、それ以前に意味がわからなかった。
瞬間的な足止めや行動阻害をできるバインドは存在意義の高い魔法だが、なのはのような遠距離型魔導師にとっては、詠唱やチャージに時間のかかる大魔法を確実にヒットさせるためにのみ意味があると言っていい。
なのはの打撃攻撃では、いくらフェイトのバリアが脆弱とはいえ防ぐことは容易であり防御に専念すればそれはさらに確実である。
フェイトの戦鎌であっても、なのはが足を止めて防御に専念したら、バインドの効果時間内に致命傷を与えるのは困難である。
それだけ戦闘魔導師たちのバリアは強固であり、それ故に初速を与えて撃ち出すことでバリアを打ち抜き、貫通してダメージを与える射撃や砲撃の魔法が進化しているのである。

「なんで…どうして……っ？」

フェイトと同様の疑問を、アースラ艦内のエイミィとクロノも感じた。
そして、カメラの映像を問題の箇所まで巻き戻す。

「最初に発動したのは…防御の魔法…？」

見合いからのチャージ開始でなのはがセットした魔法を、エイミィは分析する。
「広域防御の遅延発生だな」
発動準備を終えた魔法を、トリガーのみ残して発動を遅らせるのは戦闘魔導師の基本技術のひとつである。
「いつでも発動できるように持ってたんだ。なのははじめから、フェイトの攻撃を受けきるつもりだった。その隙にバインドのチャージをしてたんだろうな」
クロノは冷静に分析した。
「でも広域防御だって魔力は安くないし、防御で削られちゃったら…」
エイミィの疑問と同様のことを、クロノも当然感じていた。
カメラに仕こまれた魔力計測の機能が、なのはの魔力残量を示していた。
残量、わずか6%。バインド成功まではいいが、フェイトを一撃で落とす攻撃を放てるとは思えなかった。
では、何故。その疑問の答えにクロノが気づくまで、そう時間はかからなかった。
なのはは最後の魔力を振り絞り、新たな魔法陣をセットする。
なのは唯一の補助魔法、空間拘束・レストリクトロックは、飛翔や攻撃よりも先に覚えた魔法である。練度が高い分効果時間は長く、抵抗も困難なはずだった。
切り札の手は揃った。

あとは、手持ちのカードをオープンするのみである。
深呼吸とともに、レイジングハートを掲げ、周辺の空域に浮遊する魔力を集束してゆく。
薄く満たされた状態の魔力は上手く集めることができない。
だから小さな空間ごとに圧縮し、それをまとめて収集する。
なのはの周囲の空間に桜色の輝きが次々に現れ、魔法陣の中央へと集束してゆく。
《Starlight Breaker》
星空から流星が落ちるように、それは集い、輝きを増していった。
「星の光（スターライト）」の名は、そこから来ている。

「まさか…集束砲……ッ！」
フェイトはぞっとした。自分で出した発射体を戻したり集めたりする程度なら、少し練度の高い魔導師なら誰でもできる。だが、使用を終えて空中に拡散した魔力を、再度実用レベルで集めることができるなどというのはSクラス以上の技術である。
そう思ううちにもなのはの元に集いゆく流星は速度と量を増し、光球は輝きを強める。
「見てて、フェイトちゃんッ!!」
なのはは叫ぶ。拡散した残滓はすでに直径1メートルを越える巨大な光球になっていた。
その色彩はなのはの桜色に加え、わずかばかりの金色が混じっている。
「わ、わたしの魔力まで……それ、ズルいっ！」

「ズルくないッ！　これがわたしの全力全開ッ！」
悲鳴を上げるフェイトの視界に、レイジングハートを大きく振りかぶるなのはの姿が映る。
そしてクロノは確信した。
なのはがしていた奇妙な魔法の消し方は、これを見越したものだった。
残滓を集めやすいような形で戦闘空域にばら撒くことで、最後の一撃に再利用できる。
そうして撒かれた自分のものに比べれば、フェイトのものは集めにくいだろうが足しにはなる。
つまりは周辺で激戦が行われるほど、なのはは自己の限界さえ超えた巨大な砲撃を放つことができることになる。
クロノとしては完全にフェイトに同意で、こんな卑怯はアリなのかというのが正直な感想だった。

なのはは残りの全魔力を光球に注ぎこむ。この切り札が通らなければ自分に勝利はない。
トリガーを引く力のみが残っていればよく、その後はからっぽでよかった。
なのはの魔力とフェイトの魔力がひとつになった巨大な光球は、もはや暴発直前の様相だった。
「スターライト…ッ」
フェイトは必死に、ほんのわずか残った魔力をすべて防御へ注ぐ。
再利用の再利用まではできないはずである。双方魔力ゼロなら自分に勝機がある。

目を閉じることなく、フェイトはなのはをきっと見上げる。
その視線に、なのはは答えた。
過去も、未来もそこにはない。たった今の現在があるだけだった。
そして、なのはは愛機レイジングハートを振り下ろす。
「ブレイカ――ッ！」
轟音とともに、金色が混じった桜色の輝きが巨大な柱となってフェイトを襲った。
夜明けの空を貫くまばゆい閃光。
これ以上ない形での直撃だった。
フェイトの視界のすべてが桜色と金色に染まり、防御はなんの役にも立たずに破砕され、意識は一瞬で飛んだ。

そして、フェイトは夢を見た。
自分が欲しかったもの。自分の幸福。
いくつもの姿を持っていたはずのそれらは、いつの間にか形をなくし、自分の手からは滑り落ちてしまっていた。
あの日、崩れゆく庭園で、闇に落ちてゆく母に向かって呼んだ声と伸ばした手も、届く

ことなく空を切った。何も掴むことができなかった掌が冷たく、痛かった。
そして、それはきっと母も同じだったのだろうと思った。
自分よりずっと多くの時を生き、ずっと沢山の思いを持ち、ずっと沢山、愛する者を守っていた。
だから、自分の掌から滑り落ちてしまったものが大切で、愛しくて。
もう一度取り戻そうとして、そのまま闇へと落ちてしまった。
捨てられたとはいえ、必要とされていなかったかもしれないとはいえ。
自分を生み、育ててくれた母をも救うことのできなかった掌は、これから何かを掴むことができるのだろうか。
問いかけに答えは返ってこない。教えてくれる人はもういない。
だから、自分で選び、考え、答えなくてはいけなかった。

「フェイトちゃん…手ぇっ！」
突然、叫び声が耳に入った。
はっとして真上を見ると、白い服の少女が自分に向かって手を伸ばしていた。
この上なく必死な表情だった。もしかしたら戦闘中よりもずっと。
「フェイトちゃんっ！」

もう一度名を呼ばれ、数瞬の迷いの後、フェイトは静かに手を伸ばした。
ゆっくりと伸ばした手を、少女が取った。
そしてフェイトの全身に、温かな温もりに包まれるような感覚が伝わってきた。
気づけば、海面スレスレだった。
なのはがフェイトの手を取って、飛翔魔法を付与してブレーキをかけたのだ。
当のなのはもただ浮いているだけで限界に近いらしく、鋭く風を切っていた靴の翼も、いまは生まれたてのヒヨコの羽のように危なげなサイズで明滅している。
「よ……よかった……大丈夫…？」
そんな状況下ながら、なのはは半泣きでフェイトを見下ろす。
「………」
意識を失って落下した自分を、この少女が助けてくれたらしい。
そう気づき、フェイトはバルディッシュが自分の手にあり、ゆっくりした速度で飛翔する程度には魔力が残っていることを確認する。
「…ありがとう……自分で飛べるから…」
フェイトはバルディッシュを待機状態の宝石に戻し、飛翔の魔法を自力で再発動する。
そして、なのはと同じ高さに浮かび上がる。

「あ…うん…」
フェイトは静かになのはを見つめる。間近で見れば、本当にボロボロだった。
白い防護服は破損と焼けこげだらけで、髪も乱れている。
だがそれでも、この少女に自分は負けたのだ、とフェイトは静かに納得した。
「君の…勝ちだね…」
意識せず、自然に笑みが浮かんでいた。
そして、その笑顔に驚いたようになのはが何度も頷く。
「う、うん、うんうんっ！」
驚いた顔がはじけそうな笑顔に変わり、なのはは安心したように大きく息をついた。
瞬間、靴の翼が消滅し、がくんと落下した。飛行の維持もできないほどに魔力が消耗したのである。
「!!」
とっさに、フェイトはなのはの下方に回りこみ、なのはを抱きかかえた。
両腕で背中と脚を支える、安定感のある支え方である。
「………危ないよ…気をつけて」
ふう、と息をついて、フェイトがなのはを見つめる。
「あ……あ、ご、ごめん、ありがと……ありがと、フェイトちゃん！」
大いに照れつつ、なのはが謝罪した。



フェイトは自分の腕の中の、もはや自力で飛ぶことすらできない勝者を眺めた。
こんな状況にもかかわらず、なぜだか少女はひどく嬉しそうだった。
変わった子だな、と思い、また微笑みが湧いてきた。
そして同時に、不意に目尻が熱くなった。
「…………」
「フェイトちゃん……？」
名前を呼ばれて、溢れた涙がひとすじ頬を伝う。
一度こぼれた涙は、止まることなく溢れてゆく。

リニスが自分たちの前から、いつのまにか静かに姿を消した時も。
孤独や痛みが辛いときも、悲しい時も。
母に捨てられた瞬間も、存在の全てを否定された時も。
母が黄泉路へと旅立った時も。
魔法を学び初めてからは一度も流れることのなかった涙が、あとからあとから溢れていきた。
大好きだった人に必要とされなくなった。
なにもかもなくしたような気になって、自分を見失った。
生まれて初めて自分で選んだ戦いに敗北した。

だけど、それでも。無心で全力の戦いが、きっと楽しかった。
望まれて生まれたわけではない自分でも、なにもできないかもしれない自分でも。
それでも、優しい少女が海に落ちそうになるのを助けるくらいはできた。

自分はまだ、この世界で生きてみたいのだ。
そう思うと、涙が止まらなくなった。

「あの…ごめん、フェイトちゃん、大丈夫？　どこか痛い？」
おろおろと慌てるなのはに、フェイトは落涙しながらも静かに首を横に振る。
なのははハンカチを出そうとして、現在の防護服にはポケットなどついていないことを思い出した。そして自分を抱くために両手がふさがっており、涙を拭くことのできないフェイトに変わって、指先でそっとフェイトの涙を拭った。

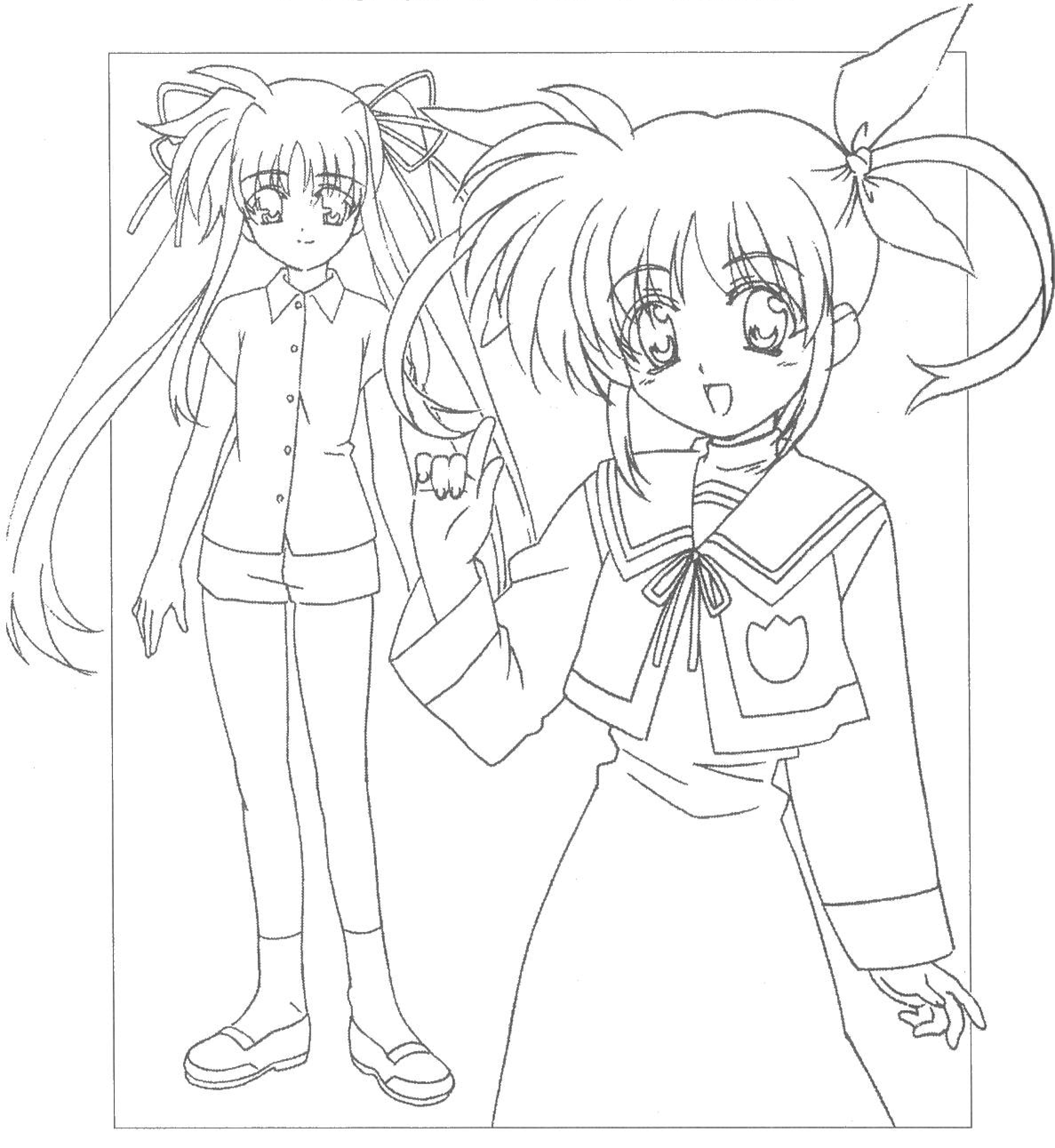
「…………」
何も言わず、心配げに自分を見上げる少女の視線と、指先のぬくもりに。
フェイトはたまらずに、なのはを抱きしめるようにして泣き出した。
自分を抱く腕の力の強さに切なくなりながら、なのはは静かにレイジングハートを待機状態に戻す。

赤い宝石のペンダントに戻ったレイジングハートはなのはの首へと戻り、両手が自由になったなのはは、ぎゅっとフェイトを抱き返した。
そうしてそっと、背中を撫でる。
「フェイトちゃん…」
フェイトが泣いている理由になんとなく察しはつくのだが「泣かないで」なのか「泣いていいよ」なのか、なのはには判断がつきかねた。
だから名前を呼んで、そっと撫でた。
その優しさに、フェイトは大きな声をあげて泣いた。声がかれるほどに。

戦闘時間、合計27分15秒。
二人の姿を、朝日が静かに照らしていた。

終章

Heart to ACE



戦闘終了後、なのはとフェイトはユーノとアルフによって回収された。
アースラの本局帰還まではいましばらく時間がある。
なのはもフェイトも、まともに歩くこともできないほどに疲労している。
アルフの提案により、二人は仮宿で休憩することとなった。

ブリッジで映像を眺めていたリンディは、ほっと胸をなで下ろした。
二人が無事であり、なおかつフェイトが何かしら吹っ切れた様子なのが素直に嬉しかった。
悲しみは悲しみとして胸にあって良いと思う。
それが力となることもある。
そして悲しみを力にするには、後悔や無力感が足枷になる。
データを見る限り、フェイトは一歩間違えばプレシアと同様の道を辿りかねないという危惧がリンディにはあった。

リンディは知る由もないが、リンディのフェイトとプレシアに対する印象は、フェイトの育ての親リニスとほぼ同じだった。
同じように責任感が強く、それ故に自分の無力に対して後悔の念が強い。

そして、それを一人で支えきるほどには強くない。
友達や仲間、大切な人がいることがそのまま自分の力になるタイプである。
ともあれ、リンディはひと安心だった。
そして、これから始まる事件の事後処理に追われる日々を思い、少し苦笑いをした。

× × ×

フェイトの仮宿の大きなベッドに、二人は並んで横たわり、泥のように眠っていた。
睡眠は、魔力回復にもっとも必要な行動である。
もとより圧倒的な魔力回復速度を誇る二人であり、数時間も眠れば安定領域までは回復するはずである。ユーノとアルフはリビングルームで、言葉少なに二人の目覚めを待っていた。
そして、時計が正午を指す少し前。二人はほとんど同時に目覚めた。
疲労の残る体を起こし、二人でベッドに並んで座る。

なんとなく視線を合わせることが出来ず、二人は無言のまま、しばらく時を過ごした。
そして沈黙が数分間続いた後、フェイトが静かに言葉を発した。
「……ありがとう……」
小さな感謝だった。
「……？」
微笑みとともに少し首をかしげて、なのははフェイトを見つめ返す。
「嬉しかった…。まっすぐに向き合ってくれて…。全力でぶつかってくれて」
「……うん……」
これ以上なくまっすぐに、これ以上なく全力で、なのははぶつかった。
だから素直にうなずいた。
「友達になりたい、って…思ったの」
そして、もう一度思いを言葉にする。

「答えなきゃ…って…思ったんだ。でも…」
フェイトが視線を落とす。
「わたしは…君の名前も覚えてなかった…」
嫌われるかな、という思いがフェイトにはあった。だが、嘘はつきたくなかった。

「なのはだよ」
しかし、なのはは明るく言葉を返す。
「高町なのは…わたしの名前」
じっと、フェイトはなのはを見つめる。

「……なのは……」
「……うん……」
「なのは」
フェイトが繰り返した。
「うん…フェイトちゃん」
静かで優しい声になのはの胸が熱くなり、少し、瞳が潤む。
フェイトはその瞳を見て思い出した。
かつてジュエルシードを求めての戦いの最中、この子の瞳はいつも悲しげだった。
戦いの最中、勇気の奥にきっと痛みを抱いていた。
自分とこの少女は…なのはは、立場も過去も、なにもかも違う。
しかし同じように願いに向き合い、誰かを傷つける痛みを抱いて、それでも戦うことを

選んでいた。

何度も助けてくれた。

何度も名を呼んで、何度でもぶつかってきてくれた。

この優しい子のために、なにかをしてあげたい。

胸に溢れるそんな気持ちを、上手く言葉にできない自分がもどかしかった。

「わたしはこれからしばらく…もしかしたら結構長く、遠くに行っちゃうんだ」

「……聞いてる……」

「…それでも…わたしは、なのはの友達になれる…？」

「なれるよ……ちゃんとなれる！」

潤んでいたなのはの瞳から、涙がひとつこぼれた。

だが、笑顔はどこまでも明るかった。

「どんなに離れても…どんなに遠くても…大丈夫だよ……？」

「…………うん」

フェイトが微笑んだ。

その後、様子を見に来たユーノとアルフは、肩を寄せ合い、瞳を合わせて静かに語り合う二人の姿を目撃する。
遠慮がちに、それでも笑顔で話すフェイト。
少し瞳を潤ませながらも、にこにこと嬉しげな笑顔で語るなのは。

それはどこから見ても、ごくありふれた友達同士の姿だった。

×　×　×

二人の試合の後、夕方にはフェイトはアースラに収容され、裁判に向けて本局へと旅立つことになった。
生まれたばかりの友達同士二人。涙の別れはあったが、それは再会を約束した、笑顔の別れでもあった。
フェイトとアルフには乗務員用の部屋がひとつ割り当てられ、本局まで通常航行で数日間の旅を過ごすことになった。
なのははその後、平凡な小学三年生暮らしへと戻り、ユーノは、なのはの元に残っていた。
なのはに望まれたということもあり、いまだ未完成ななのはの魔法の成長を、もう少し見守るべきだという思いもあった。

週末が明けた月曜日の朝に、なのはは二人の親友に告白をしていた。
「新しい友達ができたので、今度きっと紹介する」と。
フェイトはきっとこの二人とも仲良くできるという確信があり、二人もきっとフェイトを好きになるという思いがあった。

× × ×

試合の日から二週間が過ぎていた。
本局での裁判開始手続きが終わり、初公判に向けてフェイトとアルフはアースラ艦内で待機の状態である。
ここ数日、アースラの艦内で、フェイトはクロノとよく会話をしていた。
はじめは「クロノ執務官」と丁寧に呼んでいたフェイトだったが、クロノ本人の要請により、単に「クロノ」でいいということになっていた
クロノとの会話はもっぱら今後の裁判のことだったが、会話の回数を重ねるごとに、なにげない世間話も増えていった。
今も食堂で食事の出来上がりを待ちながら二人で話していたのは、先の試合のことだった。
「しかしまあ、改めて思うが…よく生きてたな、君も」

「命の危険は感じたよ…本当に怖かった」
言葉とは裏腹に、少し楽しげにフェイトが笑う。
今にも消え入りそうだった事件直後と違い、フェイトの声や表情に活気が戻っているのが、日頃から愛想とはあまり縁のないクロノにもなんとなく嬉しかった。
「君となのはの勝敗状況は、二勝一敗だったか」
「はっきり勝負がついたのだと、そうだね」
「なのはも結構負けず嫌いだからな。再戦の申しこみがあったらどうする？」
「それは勿論受けて立つけど…多分、ないと思うよ」
互いにどちらが優れているかについては、もとより興味もさほどない。
今は「互いのためになにをできるか」である。
今後もしも同じ戦場に立つことがあれば、今度は背中を預け合うことになる。
いつか来るかもしれないその時のため。
自分を助けてくれたなのはを、今度は自分が助け、守るため。
プレシアから継承し、リニスが鍛えた自分の魔法を、フェイトはさらなる高みに向かって鍛えるつもりだった。

それは、理由はどうあれ自分を生んでくれたプレシアに対する自分なりの返答であり、自分を育ててくれたリニスに対する誠意でもあった。
裁判期間も初期のうちは拘束が厳しいが、うまく進めば管理は比較的緩くなり、艦内のトレーニングルームでの戦闘訓練もできるようになると聞いている。
そして、クロノが自らフェイトの訓練に付き合うという約束もなされている。
「よろしくね、クロノ」
「ああ」

できあがった食事を受け取りながら、二人は席につく。
「そういえば…。君の部屋で、なのはとはどんな話をしてたんだ？」
なにげなくクロノが質問する。
「ああ…えと、うん、まあ、色々と」
少し、フェイトが照れる。
「前から、友達になりたい、って言ってもらってたんだけど…その返事とか」
「…ふうん」
「わたし、ずっと友達っていなかったから、どうしていいかわからなかったんだけど…なのはが教えてくれて」
「？」

「話す時に、ちゃんと名前を呼ぶんだって。相手の目を見て…はっきりと」
クロノは幾らか考えて、それから納得した。
なるほど、初めは確かに、そうかも知れない。
「裁判は、順調に行けば1年かからずに終わる。なのはと会えたら、沢山名前を呼ぶといい」
そう言うクロノに、フェイトは笑顔を返す。
「実はその話をしたら、リンディ提督とエイミィがいいアドバイスをしてくれて」
「アドバイス…？」

× × ×

アリサの部屋で、なのはたち三人は制服姿のまま、やや緊張の面持ちでソファに座る。
三人の正面には、一台のビデオカメラがある。
裁判を受けている人物と、管理世界外の人間の直接面会やリアルタイム通信は禁止されているが、手紙や文章での通信は禁じられていない。
録画した映像をビデオメールとして送るのもその範疇であり、映像記録の技術が現地の技術基準に基づいていれば違法性はないとされている。

別れの当日夜にエイミィからの通信でその話を聞いたなのはが、早速準備と手配をしたのである。そして、リモコンでカメラを操作したアリサが、「もう録画始まってるよ」と視線でなのはに伝える。

はじめの言葉は決まっていた。
なのはは息を整え、笑顔を浮かべて、声に出した。

「親愛なるわたしの友達、フェイトちゃんへ」

紹介したい親友のこと。いまの自分のこと。
会うことはできなくても、こうして思いを伝え、気持ちをつなげてゆくことができる。

フェイトはエイミィが用意してくれた小型撮影機材を部屋に起き、なのはが最初に送ってくれるビデオメールを待っていた。
アルフは説明書を眺め、綺麗に取れるよう時々テスト撮影をしたりしている。
ビデオメールのやりとりについて、話を聞いていなかったことをクロノがリンディとエイミィに抗議し、二人が「言ってなかったっけ？」という展開で少し揉めはしたが、当然

のごとく大事にはならず、クロノが二人に報告・連絡・相談の重要性を改めて訴えたのみであった。

六月の空は綺麗に晴れ渡り、風が爽やかに渡っていた。
今は別々の場所で過ごす二人の少女。
過去を抱いて、思いを強さと笑顔に変えて。
そんな二人が再会するのは、そう遠い未来のことではなさそうだった。

あとがきにかえて

こんにちは。
アニメ本編のシナリオに続いて、小説版も担当させていただきました都築真紀です。
小説版「魔法少女リリカルなのは」お手に取っていただきまして、まずは本当にありがとうございます。
熱血友情魔法バトルアニメとしてご好評をいただきましたＴＶアニメ「魔法少女リリカルなのは」の放送終了は２００４年の12月末。２００５年２月には続編の制作も発表され、そうこうするうちに漫画や小説へとメディア展開をさせていただき、今日に至っています。
続編タイトルは「魔法少女リリカルなのは A's（エース）」。
この小説でもフェイトと友情を結んだなのはが、今度は二人で新たな事件へと立ち向かいます。放送地区の方は２００５年10月から放送で、放送地区外の方はＤＶＤでお会いできれば幸いです。
この作品に触れてくれた方、支えてくれている方全てに感謝と愛を捧げつつ。
そんな皆様とまた近々のうちにお会いできることを願っております。

都築真紀

メガミ文庫

魔法少女リリカルなのは

原作／都築真紀・ivory
文／都築真紀
イラスト／奥田泰弘・長谷川光司

2005年10月11日　初版発行
2005年10月31日　第二版発行

発行者……………………大野正道
発行所……………………株式会社　学習研究社
〒145-8502
東京都大田区上池台
4-40-5
印刷・製本………………凸版印刷株式会社
カバー・本文デザイン……志岐デザイン事務所

ISBN4-05-903506-8